

910-Ko83ウ



1200500754216

910

0.83



×
複
写



始



910
K0.83

文 學 入 門



厚生省勸業局監修
厚生研究會著



新紀元社版



957
159

1

目次

文學について……………(一)

第一章 文學の特質……………(三)

第二章 文學の精神……………(六)

第三章 文學と生活……………(六)

第四章 文學とことば……………(五)

俳句入門……………(八)

第一章 俳句の本質……………(八)

一 俳句の形式……………(八)

二 季語について……………(七)

三 俳句の作り方……………(三)

第二章 俳句と人生……………	(二六)
短歌入門……………	(二七)
第一章 昔の短歌……………	(二九)
第二章 現代の歌壇……………	(三〇)
第三章 短歌の種類……………	(三一)
第四章 生活の歌……………	(三二)
第五章 作歌隨感……………	(三三)
第六章 批評と添削……………	(三四)
作詩入門……………	(三五)
第一章 詩の本質……………	(三六)
第二章 詩の作り方……………	(三七)
一 詩の出発點……………	(三八)

二 叙事と抒情……………	(三九)
三 詩の素材……………	(四〇)
四 音數律と自由律……………	(四一)
第三章 新體詩……………	(四二)
一 新體詩の黎明……………	(四三)
二 前期象徵詩……………	(四四)
三 口語・自由詩運動……………	(四五)
四 後期象徵詩……………	(四六)
五 民主主義運動……………	(四七)
六 新散文詩運動……………	(四八)
七 新浪漫・新韻律主義……………	(四九)
八 大正・昭和の詩……………	(五〇)
九 叙事詩・劇詩……………	(五一)
十 童 論……………	(五二)

士民論……………(三〇五)
士國民歌論……………(三二〇)

文學について

第一章 文學の特質

今日わが國で文學あるひは文藝といふと、小説・戯曲・詩・和歌・俳句・評論・隨筆・紀行などをふくめていふのが普通ですが、そのいづれもが、ことば（あるひは文字）を唯一の表現の手段としたものであります。文學も藝術の一つであります。このことば、またはそのことばを書き現す文字を唯一の表現手段としてゐるといふ點で、文學以外の藝術、造園・建築・彫刻・繪畫・工藝

・音樂・舞踊・演劇・映畫などから區別されます。もつとも演劇や映畫にもことばが用ゐられ、音樂にもある場合にはことばがはいりますが、しかしそれらは、ことばを唯一の表現手段とはしてゐません。實に文學こそは、ことばの藝

術として唯一のものであり、文學表現は發音されるか文字に書かれるかしなければ、まったく存在しえないものであります。

時によると無言の詩人とか、自然や人生に詩を感じるとかいふやうなことがいはれますが、それはたとへていふことで、その場合の詩人とか詩とかいふのは、本來の意味における文學に屬するものでないことはいふまでもありません。それでは、ことばをたゞならべさへすれば、それで文學になるかといひますと、さうはゆきません。たとへば「三角形ノ内角ノ和ハ二直角デアル」といふ幾何の定理は、ことばの一つゞきにはちがひありませんが、これを文學といふ人はありますまい。法律や科學の文章とか實用上の文書なども同じやうに決して文學とはいへません。文學はある一つの事實なり思想なり用件なりをたゞ説明し、傳達するだけのものではありません。これについて芥川龍之介はつぎのやうな、おもしろい説明をしてをります。

言語或は文字を並べたものは必ずしも文藝ではありません。いま文藝といふものを一人の人間にたとへれば、言語或は文字は肉體であります。如何に肉體は完備してゐても、魂がはいつてゐなければ、畢竟死骸たるにとゞまるやうに、如何に言語或は文字は並んでゐても、文藝をして文藝たらしめるものがなければ、文藝の稱を與へることは出来ません。さうすると、ことばや文字のほかに、文學をして文學たらしめるもの、文學の魂、すなはち文學の本質ともいふべきものがなければならぬといふことになりません。

その文學の本質が何であるかといふことは、なか／＼むづかしい問題で、いろ／＼な面から説明できますが、本間久雄博士が「文學概論」といふ本のなかで、わりあひわかりよく説明してゐますから、それを引用してみませう。

文學は決して、作者の知識を讀者に傳へることを主とするものではなく、

飽くまでも作者の経験した感情想像と同じやうな感情想像を讀者に喚起しようとする。つまり、作者と讀者との感情の交換、想像の交換である。思想の交換である場合もあるが、やはりこの場合にも、「思想」が思想としてではなく、感情想像の衣を着ることが必要である。例へばこゝに松島といふところを、或ひは地理的に、地學的に、或ひは説明的に記述したものがあつても、それは文學ではない。それは松島といふものについての知識を傳へるのが主要な目的だからである。しかし芭蕉のやうに「松島やあゝ松島や松島や」と、松島の風景に打たれて、詠嘆の感情を表白する場合にはそれは文學である。この句を讀んだ人も、これによつて松島がどういふ處であるかを知識的に知らうとはしないであらう。たゞこの句の作者の芭蕉と同じ詠嘆の心持ちを、この句によつて味ひたいとするであらう。即ち知識の傳達ではなくて感情の交換である。そこに文學としての第一條件があるのである。

今一つの例を挙げると、こゝに「忠義」といふ觀念又は思想があるとする。それを觀念そのもの、思想そのものとして讀者に傳へようとするには、別に文學の必要はない。それだけならば道德で澤山である。思想として説明し、その道德的價值を説くだけで澤山だからである。しかし源實朝の有名な「山はさけ海はあせなん世なりとも、君に二心ふたごころわれあらめやも」といふやうな歌に接すると、誰人も、この作者から、忠義の道德を説いて貰ふために、この歌を詠むのではないといふことを知り得ると同時に、この作者も亦忠義の道德を説くために、この歌を詠んだのではないといふことを容易に推測し得るであらう。事實は作者が、忠義といふ思想を、感情に溶かし込んで、それを詠嘆し、その詠嘆の感情を讀者が感受するといふわけである。次にこの歌には、「想像」作用が用ゐられてゐることを注意しなければならぬ。すなはち「山はさけ、海はあせなん世なりとも」といふ想像に訴へた假定である。

作者の側から云ふと、山が裂けたり海があせたりするといふことは、容易にあり得ないことであるが、これを自分の想像に訴へて、たとひそんな時があると假定しても、大君に二心を抱くやうなことはないといふ忠義の金鐵心を詠じたのであつて、讀者の側でも、山が裂けたり海があせたりするやうな時を想像して、そんな時になつてもといふ特別の状況を念頭に浮べながら、この歌の中に盛られた忠義の思想を味ふのである。つまり「想像」を通して讀者の想像と感情とに訴へるのである。

かういふ例は枚擧に遑がない。要するに想像及び感情を通じて、讀者の想像及び感情に訴へるといふのが文學の第一の特色である。従つて文學作品の讀者に與へるものは、讀者の想像を喚起し感情を刺戟して、讀者を動かすにある。單に知識を傳達するのであれば、讀者はそれに依つて教へられるが、感情的に動かされることはない。

すなはち文學の第一の條件は、作者の想像、感情を表現し、讀者の想像、感情を動かす、つまり讀者を感動させるといふ點にあるといふことが、これで大體わかります。したがつてこれを讀者—文學を味はふもの—のがはからいへば、表現を通して作者の想像や感情と同じやうな想像や感情を體驗するところに、文學があるといふことになります。ことばをかへていへば、作者の魂にふれて自分の魂をゆり動かす、あるひは自分の魂を高めるといふ點に、文學を味はふものの大きな喜びがあるといふことにもなりません。その點に關しては、五十嵐力博士がつぎのやうにもしらく説明してをります。これは文學の味はひ方について述べたものでありますが、文學を味はふといふことは、結局、文學作品の持つ文學の本質にふれてこれを自分のものにするからです、同時に文學の本質がどんなものであるかといふ點にふれてこなければなりません。五十嵐力博士は、文學のほんたうの味はひ方を「本尊對面」といふことばで言ひあ

らはしてゐます。つまり文學の本尊、本體に面接することが、文學のほんたうの味はひ方だといふのであります。

此の「本尊對面」が文學の作品を読む場合の先づ本部ともいふべきもので「文學を味へる」とは、これをいふのでありますが、此の本部たる文學の味はひ方にも、凡そ三種類があつて、その第一を「魂相打」と申します。これは作者の氣魂や、文章の持つ魅力が、向うから來て讀者の心を捉へると見てもよく、また反對に讀者の趣味や審美心が進出して、作者の文章精神の裡に飛び込むのだと見てもよいのですが、假りに雙方が歩み寄つて、出會はしよつつかると見て、これを魂あひうつ「魂相打」と名づけて見たのであります。此の「魂」といふのは非常に廣い意味に取つたので、讀む者が作者の文章に惹きつけられて「ウム、うまいなあ!」「おれの心を代辯してくれてるわ」「おれの言ひたいと思ふ事をおれ以上に言ひ現してくれてるわ」と思ふこ

ともありませうし、或は「これは有難い文章だ、お蔭で自分の人間が改造されて、一段と高くなつたぞ」と思ふこともありませうし、或は文章の中に作者の至誠真情が、實に立派に氣高く現れてゐるのを見て、拜みたいやうな氣持になることもありませうし、或は時代の思潮が文字の間に力強く呼吸して居るのに惹きつけられて感奮興起することもありませう。とにかく作者の文章のもつ精神と讀者の精神とが有機的に交通融會して、感激の場面を現出するのであります。老子の謂はゆる恍惚境を現するのであります。その結果は歩くといふよりは舞ひ踊るやうな心持になり、しゃべるといふよりは歌ふやうな心持になり、水を飲むといふよりは酒に酔つたやうな心持になるのであります。

例へば、北畠親房卿の『神皇正統記』を讀むとするならば、
大日本は神國なり。

といふ巻頭の第一句を讀んだだけで、もう彼が亂臣賊子の跋扈した時代に激し、我が大日本の國體的本質を明快端的に高唱した意氣に打たれて、ほろりとするでせう。

また清小納言の「枕草子」を讀むならば、これまた巻頭の

春はあけぼの、やう／＼白くなりゆく、山ぎは少しあかりて紫だちたる雲の細くたなびきたる。

といふ一鎖を見ただけで、彼女が自然を見る眼の如何に新しいか、その自然觀を寫す筆致のいかに新しいかに驚き、而して一觸即發式に感動の中心部を抛り出して、その批評鑑賞を高級なる讀者の趣味に任せて居るやうな心にくい風格を偲んで、一讀神氣の爽快なるを覺えませう。

或は弘法大師が病に罹つて淳和天皇に辭職を乞ひ奉つた時の奏狀の最後に伏して請ふ、陛下、終りに臨みての一言を顧みることを賜ひ、三密の法

教を棄て給はざれ。生々に陛下の法城とならん、世々に陛下の法將とならん。心神恍惚として思慮え陳べず。

と言つてあります。これは生れかはり死にかはり、眞言佛教の職域の上から陛下に御盡し申上げます。自分が輪廻轉生し全部をさへげて陛下の御爲に宗教的の城郭ともなり將兵ともなります、といふのでありますが、吾々は之を讀むと大師が眞言佛教に鍛へられた精神を通して、我が持つ全部を大君に獻げようとする眞心に打たれて恍惚とならざるを得ません。

坊さんのお話がつゞくやうですが、曹洞宗の開祖、道元禪師の『正法眼藏』を讀みますと、禪師が言葉といふものゝ神祕を説いて、

怨敵を降伏し、君子を和睦ならしむること、愛語を根本とする也。面ひて愛語を聞くは面を喜ばしめ心を楽しくす。面はずして愛語を開くは肝に銘じ魂に銘ず。……愛語よく廻天の力あることを學すべき也。

と云つてをられる所があります。これは恐らく言葉といふものゝ最も高き意義と效力とを説いたものであらうと思ひますが、眞に人を愛する者の言葉は悪口憎言でもその人を感じさせます。況んやその人を愛で慈しみ褒める言葉は、その人を有頂天に感激させます。面と向つて褒められることの嬉しいのは云ふまでもないが、陰で褒められたことを人傳ひとつてに間接に聞く嬉しさはまた格別の大歡喜で、恐らく其の人の爲には命も惜しくなくなるでせう。慈愛の言語に天を廻らす力ありとはよくも言はれたもので、之を見ただけでも道元禪師が人情に徹し、慈悲に満たされた心の持主であつたことが思はれます。

時間が無いのでこれ以上の例を擧げることは出来ませんが、立派な文學を讀むと、作者の魂と讀者の魂とが相打つて、或は感激の火花を散らさせ、或は同情の涙をそゝがせませう。少なくとも、讀む者の心が一種の清淨な愉快な雰圍氣に包まれて、舞ふやうな、歌ふやうな、酔つたやうな心地になります。

せう。無論、物によつては憤慨させ、慚愧ざんき煩悶はんもんさせられることもありませうが、とにかく作者と讀者の心との間に生き／＼した情的交渉の成立つことを假りに『魂相打』と名づけて、これを文學その物を味ひ感ずることの第一義と見たのであります。

これを立場をかへていふと——文學の味はひ方といふ立場からでなく、文學の本質といふ立場からいへば——文學とは結局、讀者に、あるひは同情の涙をそゝがせ、あるひは感激の火花を散らさせ、あるひは感奮興起させ、あるひは愉快な雰圍氣にひたらせる、といふやうにして、讀者の心情を高めるものにはかならないといふことになります。それも單なる知識や思想としてでなく、作者の生き／＼とした感情なり情緒なりを通して、讀者を同じやうな境地にひたらせるのであります。それが文學の第一の條件であります。さういふ力を持つたものでなければ、ほんたうの文學といふことはできません。

第二章 文學の精神

世間には、しばしば文學は娛樂であるといふ考へ方があります。なるほど文學は人々の心を樂しませはしますが、決して單なる娛樂ではありません。畏れ多いことではありますが、明治天皇の御製集に、「歌」といふ御題で、

天地もうごかすばかり言の葉の

まことの道をきはめてしかな

思ふことありのまに／＼つらぬるが

いとまなき世のなぐさめにしして

ときにつけ折にふれつゝ思ふこと

のぶればやがて歌とこそなれ

世の中にことあるときはみな人も

まことの歌をよみいでにけり

といふ御四首の御製があります。御一首目の御製は、「天地も動かすほどに、言の葉のまことの道、すなはち和歌の眞の道を極めたいものである」といふほどの仰せで、我が國の和歌、ひいては、文學における昔からの理想をお教へあそばしたものと拜察せられます。「古今集」の紀貫之の序文のなかにも、

力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をも和らげ、猛き武士の心をも慰むるは歌なり。

とあります。力をも入れないで天地を動かしたり、目に見えない鬼神をもあは

れと思はせたり、男女の中をおだやかにしたり、強い武士の心を慰めたりするのが歌である、といふ意味で、これは單に歌ばかりでなく、文學全體の持つ大きな力があります。さういふ道を極めることが、わが國の文學の傳統であり、理想なのであります。

御二首目は、「心に思ふことを率直にことばとしてつらねるのが、ちよつとの暇もなくいそがしい世のなかの慰めであつて」といふ御意味で、和歌を作つて樂しむといふ精神的な喜びをお教へあそばされたものと拜察せられます。

御三首目は、「時につけ折にふれて心に思ふことを、ことばとして言ひ出せば、それがそのまま歌となるものである」といふ御意味で、ことさら技巧をもてあそばさないで、ほんたうに心に感じたことを自然に歌へば歌になるものだといふ、和歌の根本の道をお教へになられたものと拜察せられます。

御四首目は、「世のなかになにか大事なことのあるときには、皆の人もほんた

うの歌をよみいでたものである」といふ御意味で、世のなかに大事があり、したがつて精神が緊張しふるひたつてゐるときにこそ、まことの歌は生まれるものであるといふ、創造の原理をお示しになられたものと拜察せられます。

わが國最古の歌集である萬葉集のなかに防人さきもりの歌つた歌がいくつか收められてをります。防人といふのは、支那の侵略に備へるため、當時九州邊のまもりに遠い東國から召された兵士ですが、その防人の歌にはわが國民精神の純粹なものが歌ひあげられてゐて、今にわれ／＼國民の心をはげましてくれまゝ。その人々は親や妻子との別れを悲しみながらも、みづからを「大君のしこの御楯」とかたく任じ、「大君のみことかしこみ」「大君のみことのまゝに」と歌つてゐます。すなはち、どんなことがあつても大君に自分を獻げるといふ固い自覺と決心とを心の底から歌つてゐます。それらの人々は多く教養にとほしい素朴な人でありましたが、その精神は高く清らかなものであります。國を守らなければ

ばならないといふ一大難局に際して、精神がふるひ起り、調べの高い文學を生んだのであります。そのなかから二三首引いてみませう。

おほ君のみことかしこみ磯にふり

うのはら渡る父母を置きて

「大君の仰せをありがたく奉じ、なつかしい父母を家に残してきて、かうして磯の岩に觸れつゝ恐しい海を渡つてゆくのである」と意味で、はせつかべのみやつこひとまろ丈部造人麿といふ防人の歌つたものであります。

あられふり鹿島の神を祈りつゝ

すめらみくさに吾は來にしを

「あられふり」といふのは、「鹿島」にかゝる枕詞です。一首は、「鹿島の大神に武運長久の祈りをこめて、天皇の御軍勢に加はつて私は來たものを」といふ意味で、「どうしても武勳を立てなければならぬ」といふ固い決心が言外にふくめ

られてゐます。ひたちくのくに常陸國から召された防人の歌であります。

今日よりはかへりみなくておほ君の

しと醜の御楯と出で立つ吾は

「醜の」は、にくみのゝしる意味の接頭語ですが、轉じて自分をへりくだつていふ時にも用ゐられます。「御楯」は、天皇のために敵を防ぐ身でありますから、自分を楯にたとへていつたのであります。一首は「今日からは家のこと、自分のこともなにも心配することはなくなつて、ひたすら大君の御ためにこのいやしい身を御楯としてさゝげ奉つて、自分は出發するのである」といふ意味で、皇室にたいする至忠のまごころを率直に言ひつくしてゐます。

かういふ防人の歌を萬葉集に収録したのは、當時のすぐれた將軍で同時に歌人であつた大伴家持おほとものみかもちではなかつたらうかと思はれますが、その家持がまた、日本の國民としての千古變らぬ覺悟をうたつてゐます。それは聖武天皇の御代に

陸奥國から黄金を獻つたことがあつて、天皇が非常にお喜びあそばされた、それを當時越中にあつた家持が、はるかに賀し奉つて長歌一首と短歌三首を作つてゐますが、その長歌のなかに、

海行かば みづく屍かばね 山行かば

草むす屍 大君の へにこそ死なめ

かへりみは せじ

といふ一節があります。これは大伴氏—大伴氏の祖先は天忍日命あめのにしひのみことで、天孫降臨の際には大來目部おほくめべを率ゐて軍功をたて、その後、神武天皇の御東征の折には、その後裔である道臣命みちののみことが同じく大來目部を率ゐて戦功をたてたことは名高い話で、古からの武門の家がらであります—に先祖から傳へきたつた宣言で、それを家持が長歌のなかに織りこんだものでありませう。「海をゆくなら屍を水にひたさう、山をゆくなら屍を野にさらして草の生える屍としよう。常に身命

をさへげて大君の身近かで死なう、わが身を顧みるやうなことは断じてしない」といふほどの意味で、大君の御ためにはいつでも喜んで死なうといふ、日本國民としてのまことの覺悟が高らかに力強く表現されてゐます。この歌が今日われ／＼國民の好んで歌ふ歌の一つになつてゐるのも當然であります。

支那事變以來、今度の大東亞戦争に至るこの重大な時代に生まれた文學にも、すぐれたものがたくさんあります。たとへば小説では映畫にもなつた火野葦平の「土と兵隊」および「花と兵隊」「麥と兵隊」等のいはゆる兵隊もの、上田廣の「建設日記」その他があり、草葉大尉の記録的作品である「ノロ高地」のやうな作品もあり、詩・和歌・俳句等にもそれ／＼すぐれた作品があります。それらのなかには、文學の専門家でない、一般の將兵の作品もたくさんあり、そしてさういふものの中にかへつてすぐれた作品が多いのです。二三の例を引いてみませう。

自分はこの頃深く考へさせられることがある。私は第二分隊長である。さうして私の下に十三人の部下が居る。それはいつたいどういふことか。それらの人々は悉く昨日までは自分とは何の関係もない人達であつた。ただ同じ日本人であつたといふだけである。動員が發せられ、部隊が編成され、それらの人々は第二分隊長となり、私が第二分隊長となつた。それは唯部隊本部に於ける都合に依つてさう定められたに過ぎない。しかし、その單なる事務上の都合によつて決定された編成表が我々の手元に配布せられ、我々が點呼指名された通りに整列した時に、最も崇嚴なる確固不拔の關係がそこに生じた。私は生れて以來、かくのごとく嚴かな思惟の中におかれたことはない。ここに集つた兵隊は郷里では悉く相當の生活をし、仕事をし、力を持つて居た人であるに違ひない者が、今、兵隊となり、第二分隊長となり、一歩兵伍長である私の部下となつた。これは私などよりも遙かに高い人格の上に、私は

分隊長となつた。これらの人々は自分の命令に従ひ、自分の號令に依つて動き、驚くべきことには、死の中へでも飛びこんでゆくのである。これはいつたいどういふことであらうか。我々の日常の凡庸なる生活の中に於ては、自分自身を自由にすらする事が出來ず、まして他人を自由にし、殊に死の中に進ませ得るものを一人としてすら所持することは至難のことである。私は今十三人の部下を得、これを命令によつて自由に水火の中に突進せしめ、死の中に投じ得る、と云はれたのである。さう聞かされた瞬間、私はあまりの事の重大さに、何か恐しく、愕然とするとともに、この瞬間を基點とする、私が嘗て想像もして居なかつた、従つて用意もして居なかつた、一つの新しい生活の方法が、倏忽として身内に自覺されたのである。私達分隊長は又小隊長とさういふ關係にあり、小隊長は又中隊長と同じ關係に、中隊長は大隊長と、大隊長は、——次々に擴大されてゆくこの關係は私には人間として思惟も及

ばないほど偉大なことであると考へられ、その高く大きなものは私の想念からはみ出してしまふほどなので、私は眼前の感想をしつかりと胸に抱き、この新しい生活の前進を注意深く生きることに決心したのである。(火野葦平作「土と兵隊」の一節)

戰場における兵隊生活の規律、いゝかげんなものを一切よせつけない嚴肅な心がまへが率直に表現されてゐます。これは日本の軍隊にのみ見られる秩序の嚴しさであり、精神の美しさであります。

それは實にはらはらせる光景であつた。敵の陣地からは手榴弾に加へて新しく迫撃砲を打ち出したのであつたが、それらの弾が無數に白い煙をあげて炸裂する間を、僅か八九名の一隊が登山者のやうに進んでゆくのであつた。ぢりぢりと一步一步山頂の急な斜面を登つてゆく彼等の姿は、凡そ猛烈果敢な突入などといふ言葉からは遠いものであつた。精神に於いてこそ誰よりも

勇敢な彼等ではあつても、行動はそのやうに敏速には出來ないのである。然も彼等は少しも敵弾にひるむ様子はなく、確實に一步一步と敵の壕に近づいて行つた。やがて彼等は次々に身を躍らして敵の壕を飛びこえ、その後ろに廻つて、壕の内に向つて銃劍を構へた。山頂の稜線に突立つた彼等の姿は、くつきりと青い空に浮き出して、影繪のやうに鮮かであつた。日本刀をかざした將校が二人まで彼等の中にあつてゐるのも、はつきりと見てとることが出來た。(中谷孝雄作「滬杭日記」の一節)

この作者は武漢作戰の際に大別山山脈方面の戦闘に従軍した作家で、本文はその大別山中の敵の一據點を突撃した時の光景を描いたものでありますが、日本軍の行動と、その精神の強さが的確に表現されてゐます。

絶對につらぬかむ目的さだまりて

うちこぞりたるひとつ魂たましひ(齋藤茂吉)

天皇の戦宣らす時おかず

奮ひ飛び立つ荒鷲が伴（北原白秋）

戦ふも戦はざるも死ぬべくは

いさぎよく死なむ戦ひ貫きて（齊藤瀧）

これらの歌はいづれも大東亞戦争になつてから作られたものであります。日本民族の永久に變らぬ決意や皇軍にたいする讚歎が表現されてゐます。實にわれ／＼の民族は、戦争になつたからといつて恐れたり、しりごみしたりするやうなことなく、かへつて精神を奮ひたゞせてすぐれた文學を生むのであります。高村光太郎氏の最近の詩に「必死の時」といふ雄大な詩があります。

必死にあり。

その時人きよくして、つよく

その時ころ洋洋としてゆたかなのは

われらの民族のならひである。

人は死をいそがねど

死は前方より迫る。

死を滅すの道ただ必死あるのみ。

必死は絶體絶命にして

そこに生死を絶つ。

必死は狡智の醜をふみにじつて

素朴にして當然なる大道をひらく。

天體は必死の理によつて分秒をたがへず、

窓前の茶の花は葉かげに白く

卓上の一枚の桐の葉は黄に枯れて

天然の必死のいさぎよさを私に囁く。
 安きを偷むものにまどひあり、
 死を免れんとするものに虚勢あり、
 一切を必死に委するもの、
 一切を現有に於て見ざるもの、
 一步は一步を捨てて
 つひに無窮にいたるもの、
 かくの如きもの大なり。
 生まれて必死の世に遭ふはよきかな、
 人その鍛錬によりて死に勝ち、
 人その極限の日常によりてまことに生く
 未練をすてよ、

おもはくを恥ぢよ、
 皮肉と駄駄とをやめよ、
 そはすべて閑日月なり。
 われら現實の歴史に呼吸するもの、
 いま必死の時にあひて
 生死の區々たる我欲に生きんや。
 心空しきもの満ち、
 思ひ専らなるもの精緻なり。
 必死の境に美はあまねく、
 烈烈として芳ばしきもの、
 その境にただよふ。

ああ、必死にあり。

その時人きよくしてつよく

その時こころ洋々としてゆたかなのは

われら民族のならひである。

かういふ、だれもが死を覺悟しなければならぬやうな非常の時にあつて「人きよくしてつよく」こころ洋々としてゆたかなのは、たしかに日本民族のならひである。さういふ、きよく、つよく、洋々としてゆたかな心からこそ、ほんたうの國民文學が生まれてくるのであります。ふたゝび

世の中にことあるときはみな人も

まことの歌をよみいでにけり

と仰せられた御製のありがたさがしみぐと拜せられるではありませんか。

文學が決して單なる娛樂ではないといふことは、もはや説明を要しますま

い。以上は主として戦争に關係のある作品を引用しましたが、なにも戦争文學にかぎつたことではありません。平時における文學といへども、國民としての、自覺、決意をたかめ、國民の精神をゆたかにするものでなければなりません。總じて日本の文學は、國民の一生をゆたかにし、正しく生かし、國民精神の完成に直接間接役だつものであります。くだらない文學は單に低級な娛樂のみをあたへ、時によると國民を墮落させるやうなこともないとはかぎりませんが、すぐれた文學は、國民を高め、國民に希望をあたへ、國體、國民、國土にたいする愛情をつちかひ、國民としての眞の生き方を教へるものであります。しかもそれを單なる理窟としてでなく、實感として、感情として、ほんたうの血肉として教へるのであります。さういふ文學であつてこそ、高い精神を持つた文學といふことができ、國民に精神の糧かたをあたへることができるのであります。

もつとも今までの現代文學が、すべてさういふ高い精神を持つてゐたかといふと、さうはゆきません。だいたい明治以後の文學といふと、幸田露伴、森鷗外、夏目漱石、與謝野晶子、正岡子規その他のすぐれた文學者によつてりつばな作品も作られてゐますが、明治の終りごろから自然主義の文學、自由主義の文學などもあらはれて、日本の文學を精神の低い、かたよつたものにした傾向もないではありません。ことに現實主義とかリアリズムとかいふことがいはれて、現實をうつす、眞實をうつすといひながら、實際は人間生活の暗黒な面、みにくい面をことさらに描き出し、人間の理想や希望を否定し、そのかほりに絶望や懷疑や憂鬱をあたへることを目的とした文學も多くあらはれました。さういふものが深刻な、深みのある文學と考へられたのであります。けれども今日または明日の文學は、もつと精神の高さを表し、國民の精神を鼓舞するものでなければいけません。

ドイツのローゼンベルクといふ人の書いた有名な本に「二十世紀の神話」といふのがあります。そのなかで、人間は精神によつて生きなければならぬことを強調し、ドイツの精神、すなはちゲルマン魂に立脚して、文學も、そのほかの文化も組織しようとしてゐます。すなはち決意のある文化、文學をうちたてようとしてゐます。さうして「いまこそ偉大なる夢想家を最も偉大なる實際家として尊敬すべき時代である。造形への熱情、聖なるものへの憧憬、萬象の理を究めんとする哲學者の夢、發明家の夢、政治家の夢、そこにあらゆる精神力はよつてつひにかゞやかしい創造が生まれる」といつてゐます。日本の文學は日本人の國民精神を鼓舞し、感情を養ひ、自覺を高めるものでなければなりません。忠君愛國とか、祖先を崇び、家名を重んじるとか、自然を愛好するとか、清淨潔白であるとか、さういふ本來の國民性の美點をます／＼のばすとともに、その他の缺點にたいする反省をうながすやうな文學こそ望ましいものです。こ

とに現代は總力戰の時代です。國のあらゆる機能をして高度國防國家の建設に役立たせなければなりません。文學もまたさういふ目標にそつてゆくべきことはいふまでもありません。

したがつて文學者といふものも、今までのやうに、自分々々の個性とか、好みとかにばかりしたがつてゐることは許されません。この點に關して、文學者の一人である淺野晃氏がつぎのやうに語つてゐますから、それを引用してこの章の結びとしませう。

今日に於ける文學の第一の問題は、文學者の決意の問題である。いはば文學以前の、一個の臣民としての覺悟の問題である。むろん技術の問題も大切である。思想の問題も大切である。しかし今日の第一の問題は、あくまで人であつて物ではない。

われ／＼は、自分といふものを自分自身のもの、『私のもの』と解して、自分

が日本の臣民すなはち『公のもの』であることに想到しない。しかも、好きだから文學をやるのだといふだけの氣持なら、生きるのがいやになつたから死んでやるといふのと同じで、それは臣民の道として許されないものなのである。況んやこの危機に於いて、國民の一人残らずが何れかの部署に就いてゐる時、かやうな態度は不忠の態度である。今日の事態は、各人がその任務の遂行に於いて最善をつくすことが、國の名に於いて期待されてゐるのである。

文學は精神の事業である。それは單に國民のこころのおのづからにして發した偽らぬ聲といふだけのものではない。國民の決意の醇乎として醇なるもの發現でなければならぬ。國の重きをになふ臣民の衷情の、最も高きもの、最も深きもの、最も徹せるものの表白でなければならぬ。

第三章 文學と生活

文學は人間の精神によつて作られ、生みだされるものでありますが、人間の精神は人間の生活を離れてはあるものでありませんから、文學と生活との關係が非常に密接であるといふことがわかります。しかし生活がたゞちに文學になるといふことはありません。生活が文學になるためには、その生活が精神によつて反省され、文學意識にまで高められなければなりません。よく世間には、いろ／＼な苦勞を積んだ人があつて、自分の生活はまるで小説のやうだとか、自分の生活をことばに表現すればりつばな小説になるなどといふ人もありますが、たゞ苦勞の多い生活、變化のある生活、波瀾に富んだ生活、といふだけで

は文學になりません。さういふものが、文學になるためには、さういふ生活を材料としてそれを文學に高める精神の働きが必要です。

たとへば工場に働いてゐる人なら、たいてい似よつたやうな生活を經驗するでありませうが、そのなかから文學を生みだす人とさうでない人とがあります。文學を生みだす人は自分の精神を働かして生活に反省を加へ、そのなかから文學になるものを見つけ出してくるのです。すなはち自分の經驗するすべての生活を自分の文學意識によつて生かしてくるのです。改造社の「新萬葉集」のなかには無名の歌人の歌がたくさん收められてゐますが、そのなかから勞働に従事してゐる人の自分の生活を歌つた歌をあげてみませう。

灯のくらくつめたき壁に菜つ葉服

かくると釘のあたまをさぐる (神山信勝)

言ことに出て何も言はねど眼まなこにものを

言ふ人と居て今日も働く (片岡長英)

工場を出づれば外の明りあり

夕焼空に向きて歩むも (大城清史)

これらは工場に働く人の歌です。さういふ生活のなかから題材を見つけ、そこに何等かの感情を動かして文學化してゐるのです。

朝夕に湧くさびしさは百姓の

おのおのが持てる寂しさならむ (加藤哲雄)

甘藷掘りが仕事となりしこの頃は

手につきし澁を落さず久し (江波戸醇一)

牛ひきて夕べを下る薄原

いっしか蟲もなかずなりたり (大野信貞)

これらはいづれも農業に従事してゐる人々の歌です。毎日々々甘藷ばかり掘

つてゐる、毎日同じやうに夕方になると牛を引いて薄原をくだる、たゞそれだけの生活をくりかへしてゐるだけでは、文學はできません。詩的精神、あるひは歌心うたごころを働かして、さういふ生活に、寂しいとか、楽しいとか、美しいとかいふ反省を加へてゐるのです。

ふりあげて打ちおろしたる鶴嘴つるはしを

がつちりうけて岩はくづれず (梶原太)

これは土木工事にでもしたがつてゐる人の歌だらうと思ひますが、さういふ生活のなかからもかういふ詩が創造されるのであります。

かういふことは、ひとり和歌にかぎつたことでなく、詩、俳句、小説、戯曲等すべての文學に通じていへることであります。生活はすべて素材であります。その素材を文學として表現するためには精神の働が必要で、したがつて表現といふことは、たゞ事實なり経験なりをありのままにいひあらはすといふ

ことではなく、作者の主観、精神によつてその事實を整理し、價值づけること
であります。すなはち素材を價值あるものに構成することでありませう。

文學が單なる現實を摸寫したゞけのものでなく、われ／＼の生活の推進力
あり、生活を育てる養液である、といはれるのは、作家が自分の精神を投げか
け、心血をそゝいで、素材のなかから價值を見つけだし、美を創造したもので
あるからです。したがつて表現されたものは、あるひは事實とはちがつてゐる
場合があるかもしれません。たとへば子どもがけんくわをして泣いた、しかし
その經驗を表現した文章には泣いたことは書いてなくて、反對になぐられたけ
れども、じつところへて泣かなかつたといふふうに書いてあつたとします。こ
れは單なるうそではないのです。つまりその子どもにとつては男の子は決して
泣くべきでないといふ一つの理想があるのです。だから泣かなかつたと書いた
ことは、すくなくともその子どもの精神生活としてはりつばに一つの眞實なの

です。あるひは、ある非常な感激の場面に國旗が掲揚された、風のない日でそ
の國旗はだらりと垂れさがつたまゝであつたが、その感激の場面をあらはすの
には、どうしても國旗が風にひるがへつてゐないといけない、そこで表現する
場合にはその國旗がひるがへつてゐたやうに書くといふことも、文學の立場と
しては一つの眞實といふことができます。極端な例ばかり引きましたが、文學
といふものは、さういふふうに、素材を整理し、價值化し、美化するものなの
です。

最近、ことに支那事變以來、素材主義といふことがいはれて、報告風の文學、
記録風の文學が盛になりましたが、さういふものも文學である以上は、單なる
素材のまゝではないはずでせう。これについて豊島與志雄氏がつぎのやうにい
てゐます。

記録的なものにせよ、報告的なものにせよ、働生活的なものにせよ、そのな

かに、文學の本質的なものが生動し續けてゐないであらうか。―次のことは人づてに聞いた話であつて、眞偽のほどは確かでないが、恐らく本當のことであらう。即ち、『土と兵隊』のはじめの方に、或る兵が船の甲板から、千人針の布を海中に落とし、泳ぎを全く知らない身でありながら、その布を追つかけて海に飛び込み、布を掴んであつぶあつぶやつてるところを、水兵から救ひあげられる、といふ件であるが、あれは事實でなく、實は、その兵は自ら海に飛びこみはせず、水兵に頼んで千人針の布を拾つてもらつたのであると筆者が語つたさうである。ところで、その事實よりも、千人針の布を追つかけて兵が自ら海中に飛びこんだとする方が、その兵の感情を浮出させるし、敢て云へば眞實性を昂揚する。かうした例は、所謂素材主義の作品を仔細に検討してみるならば至る處に夥しくあるであらう。そしてこれは、全く文學的表現方法、傳統的な方法なのである。

なほ素材と表現との關係について、山本有三氏が、つぎのやうなおもしろいたとへ話をしてゐます。

これはある農學士から聞いた話だが、桑の葉には殆ど蛋白質がないさうである。そしてそれを食ふ蠶自身の體にもまた極めて蛋白質は乏しいさうである。ところが、その蠶が桑の葉を食べて作り出すところの繭は、殆ど全部蛋白質で出来上つてゐるものださうである。

蛋白質の少ない蠶が蛋白質の少い桑の葉を食べて、蛋白質ばかりの繭を作り出すといふことは實に奇妙なことである。どうしてかういふことが起り得るのか。それはまだ現代の科學では説明がついてゐない。けれども私はこの話を聞いたとき『これだな。』と思つた。

専門家にすらわかつてゐないことが、私のやうな蠶に手を觸れたこともないものに、勿論分らう筈がない。併し私はたゞこの事實に驚嘆した。驚嘆す

ると同時に、はたとあることを感得した。いふ迄もなく蠶の腹の中がどうなつてゐるのか、腹の中に這入つて行つた桑の葉がどう變化するのか、そんなことは全然自分には分らない。けれどもあの醜い蠶が外界から材料をとり入れて、それを全く自分のものにしてしまひ、そしてあの美しい繭をすつかり自分自身のものとして新しく吐き出してゐる働きには、自分は只管驚嘆せざるを得ない。自分は思ふ、藝術の急所は確にこゝであると。

蠶は材料をとり入れて、決して生のまゝで吐き出してゐない。桑を食べて繭を生み出してゐる。蛋白質のないものから蛋白質を作り出してゐる。ある意味からいへば無から有を生じさせてゐる。併しこれは決して手じなではない。材料を腹に入れたとき一大轉回を興へてゐるからである。即ちそちらのものにしておかないで、みんなこちらのものにしてしまふからである。そしてこちらのものとして、改めて吐き出してゐるからである。この働き、こゝ

に藝術の極致があるのではあるまいか。(中略)

藝術はそちらの問題でなくて、こちらの問題である。外物を自分に同化して、更に自分のものとして輝かし出すことであると私はいつた。即ち自然をありのまゝに模寫するのではなくて、自分が自然を表象して行くのである。あるものを寫すのでなくつて、あるべきものを描き出すのである。藝術は創作であるといふのは正しく此意義でなければならぬ。それ故藝術上の創作は所詮主観の上に立つものである。けれども注意しなくてはならないことは、創作は主観的のものだからといつて、徒に主観に走り、獨りよがりになつて、實在性を失ふやうになつては大變だといふことである。

腹の中ですつかり自分のものにしてしまつて、改めて自分のものとして表出することが藝術——したがつて文學の眞髓であるといふことであります。文學作品といはれる以上は、そこに、作者の精神なり感情なりが脈々と息づいてゐる

やうなものでなくてはなりません。これを別の立場でいへば實感の問題といつてもよいかと思ひます。すなはち文學作品にとつて大事なのは、素材よりも實感である。實感のこもつてゐない作品は、ほんたうに讀者を感動させることはできません。これはわれ／＼の日常の話などでもさうで、實感のこもつた話ならば、話は下手でも、聞き手の胸にびたり／＼的確に響いてゆきます。反對に實感のない話だと、どんなにことばを飾つてみたところで、聞き手の心をとらへることはできません。文學の場合も正にその通りで、作家がほんたうに心血をそ／＼で心の底から表現したやうな作品なら、必ず讀者を感動させ、その精神を高めることができます。

以上で大體、文學作品にとつては、素材よりも表現そのものの方が大事であるといふことを一通り述べましたが、それならば素材はどうでもいゝかといふと、さうはゆきません。文學にとつては、素材も非常に大事な役割をつとめま

す。文學の素材となるものは、必ずしも現實の生活ばかりでなく、夢や神話や傳説や歴史のやうなものも素材となります。しかしさういふものが文學の素材となるためには、われ／＼の生きた生活にたいして何等かの意味を持つてゐなければなりません。われ／＼の生きた生活にとつて何の關係もないやうな空想や歴史では、文學の素材とならないのです。だから文學の素材となるものは、常に生き／＼とした實生活のなかにあるといはなければなりません。さういふ素材を扱つた文學でなかつたら、われ／＼の生活とは全く關係のないものになつてしまひます。文學にとつて生活が貴重なものであるといふ以上、どうしても素材を重んじないわけにはゆきません。だから作家にとつては、生きた生活のなかから素材を発見するといふことが大事です。素材といふものは作家が眞劍になつてさがさなければならぬので、決して軽く見ることはできません。河上徹太郎氏は「元來小説家は原則としてすべて新しい現實や素材に惹かれ、水

溜めの魚が清水の流れ込む口に集るやうに、そこに集る本性を持つてゐる。此の本性は當然でもあり、必要でもある。つまり小説家といふものは、先づその點で道徳的に生活の常套と沈滞を嫌ふ先驅者、批判者の資格を獲る譯なのだ。しかも之が本性であつて見れば、彼は生活の常套に處するよりも、新奇に處する方が身についてをり、仕事としても本質的だといへる結果になる」といつてをりますが、とにかく文學における素材の重要性を否定することはできません。

いゝ素材を見いだすためには、作家自身の生活がすぐれた、ゆたかなものでなければなりません。すぐれた材料は、すぐれた生活のなかのみあります。すぐれた生活といふことは、物質的に豊富な生活といふことではなく、精神的に豊富な生活といふことです。むしろ物質的には苦難にみち、その苦難と戦つてみづからの生活をきりひらいてゆくやうな強い生活のなかこそ、精神が昂

揚され、したがつていゝ素材も豊富になります。いゝ素材といふことは、單に珍奇な材料ではなく、さういふ眞剣な生活のなかから見いだされた生き〜とした材料であります。したがつて、いゝ素材が豊富に見つかるやうな生活をしてゐれば、それだけその作家はすぐれた精神生活をしてゐるわけですから、すぐれた表現を生みい出すことができるといふこともできませう。

とにかく、すぐれた素材をすぐれた詩的精神によつて處理してゆくと、ところに、すぐれた作品が生まれてくる道理です。さうなると、もつとも重大な問題は、文學を作る人の生活です。やくざな生活からはやくざな文章しか出てきません。高い生活からのみ高い文學が生まれてきます。ほんたうの日本の文學は、日本精神をきたへて身につけた人の生活によつて生み出されます。文學者は文學者である前にまづりつばな國民でなければならぬといはれる理由がそこにあります。

第四章 文學とことば

文學は、ことばによつて表されたものの全體をさすわけではありませんが、どんなに高尚な感情や情緒でも、詩的な直観や想像でも、ことば——あるひはそれを書きあらはす文字——として表現されなければ、文學にはならないといふことは、すでに第一章にも述べました。すなはち文學とは、ことばによつて表現された藝術であつて、たゞ心のなかにしまつてあるだけでは、どのやうな感情も精神も文學といふことはできません。ことばは、作家が自分の感情なり想像なり思想なりを多くの人に訴へるなかだちをするものであつて、ことばがなければ文學はなりたちません。ことばは、文學の目的ではないかもしれません

が、しかもなほ文學にとつて缺くことのできない、唯一の表現手段なのです。したがつて昔から文學の仕事にたづさはるほどのものは、きまつてことばを大事にしました。ロシヤの文豪ツルゲーネフは、その臨終の床から同時代のロシヤの作家たちに呼びかけて、「われ／＼の國語——ロシヤの國語を嚴格に、純粹に、のちの世に傳へてくれ」と叫びました。またフランスのフローベルといふ作家は、自分の弟子であるモーパッサンに教へて、「われ／＼がいひ表はさうとするものいかなるものにもあれ、そこにはそれを表すたゞ一つのことば、それに運動を興へるたゞ一つの動詞、それを性質づけるたゞ一つの形容詞があるばかりである。われ／＼はこのたゞ一つの名詞、動詞および形容詞を發見するまでそれをさがし求めなければならぬ。そしてさういふことばに近いことばを發見したといふだけで満足してはならない。またはさうすることが困難であるからといつて、いゝかげんなごまかしをしてはならない。」といった話も名

だかい話で、これをフローベルの一語説といつてゐます。つまり一つのことをいひあらはすのには、一つのことばしかない、そのことばを見つけ出すのが作家としての大事な仕事であるといふ意味で、フローベルが、ことばといふものをいかに大切にし、その使ひ方についていかに嚴格であつたかといふことがわかつて、興味のふかいものがあります。ずつと古いところではギリシヤのアリストートルといふ哲學者が、「適當なことば」といふことを、すぐれた文體の條件の一つとしてあげてゐるのを見ても、昔から文學者、文章家といはれるほどの人が、いかにことばを尊重し、事實なり自身の氣持なりをびつたりいひ表すやうなことばを求めたかといふことがわかります。

わが國においても、古くから「言靈」といふことばがあります、萬葉集にある山上憶良の長歌にもそのことばがづぎのやうに用ゐられてゐます。

神代より 言ひつて來らく そらみつ やまとの國は すめがみの

いつくしき國 言靈の 幸はふ國と 語りつぎ 言ひつがひけり

今の世の 人もことごとく 目の前に 見たり知りたり云々

といふのでありまして、意味は、「神代からいひ傳へてきてゐることには、この日本の國は神々の威勢のいかめしい國であり、ことだまの助けあふ國であると、語りつぎ言ひつぎしてきた。そのことは、今の世の人もみんな、目の前に見てよく知つてゐることである」といふのでありまして、天平五年の春に憶良が遣唐大使多治比真人廣成にはなむけ(饞別)として送つた歌であります。すなほち無事に任務をはたして、早くお歸りになつてくださといふ意味の長歌の最初の部分であります。

もと／＼ことばは相手に向つて發し、聞き手にある刺戟、影響をあたへる力を持つてゐるものでありますが、それはことばそのものに神靈が宿つてゐて、そのことばを口にいひ出すと、自然に微妙な靈徳があらはれるためであると考

へたのでありまして、われ／＼の祖先がいかにも國語を尊重し、その靈妙な刀にたいして信仰を持つてゐたかといふことがわかります。ことばはたしかに死んだものではなく、生きてゐるものです。かういふ考は、文學者ばかりでなく、一般の人々も持つてゐた思想であり信仰であります。ことばの藝術である文學において、特に強くあらはれてゐることはいふまでもありません。

さういふふうには、ことばは文學にとつて尊重されなければならぬものであります。それは必ずしも、文章なり、詩歌なりを作るときに、ことさら美しい文句やきれいなことばをならべてかざりたてるのがいゝといふ意味ではありません。いや、かへつてその反對なのです。心にもない美しいことばをつなぎ合せたからといつて、決して人の心をうつことはできません。たゞそら／＼しい感じをあたへるにすぎません。根本は自分自身の實感です。その實感にびつたりするやうなことばを見つけることです。眞實に自分に切實なことばをもつ

て表現することです。古今の名文章、傑作といはれるものは、おほむねさういふ眞實なことばを以て表現されてゐます。最大級の形容詞や感傷的なことばは文學にとつては不必要であり、むしろ有害でさへもあります。

實感のこもつた切實なことばといふものは、おほむね、われ／＼の日常生活のなかに生きてゐることばです。だから文學にたづさはる人は、さういふ日常の生きたことばに敏感であり、さういふことばのなから美しい眞實なことばを見つけ出して使ふのです。高村光太郎氏が「生きた言葉」といふ題で詩人のことばにたいする深い用意を語つてゐますから、それを引用してみませう。

私は外を歩くのが好きで、冬になると大抵毎日一度はあてもなく外を歩き廻る。足が早いので一人で歩けば二三里の徒歩にはさまで時間を費さない。又自由自在に歩きたいから多くの場合は一人で歩く。風のやうに歩いたり、流れる埃のやうに歩いたり、熊のやうに歩いたり、時には鶴のやうに歩いた

りする。或時はまるで自分自身の中に没入した状態で歩き、或時は又、外界に一々魂を奪はれながら歩く。

もと／＼室内での仕事に鬱屈した酸素不足のやうな状態から自然に外へ飛び出すのであるから、足は多くの場合、河の流れのある方へ向く。だから東京では隅田川へゆく、荒川へゆく。土手や白髻橋や駒形橋のまんなかに立つて遠くから来る筑波おろしや、なほ遠くから来る赤城おろしに思ふ存分呼吸する。

雨の殊更好きなき私は、きれいに砂塵の拭ひ去られた自然の中を氷雨にぶるぶるふるへながらも酔つたやうに歩く。傘を持つた時、雨滴が高い空から落ちて来て傘の紙にあたる音と響きと、傘の骨を傳はつて来るその軟い小さな物體の手ごたへとが不思議な愛撫となる。傘の好きな私は少し曇るとちき傘を手にする。

しかし又私は街衢がいくの中をも多く歩く。むしろ町を歩き廻る方が多い。その場合此の東京のふしだらな街路や建築などはそんなに眼に入らない。だから氣にもならない。人の動きの中を歩くのが好ましいのである。人は街路で實に生きてゐる。あらゆる生活をそれ／＼背負つて、家庭では決して見られない街上獨特の眞剣な顔をしてゐる。あまり人がゐるので卻つて皆獨り居るやうなムキな様子をしてゐる。『門を出れば七人の敵』とかいふ變な諺のある日本では殊にさうのやうである。街上をゆく私の心を一番打つのは矢張人間の聲である。生きた言葉である。人間が不用意に必要なに應じて进出させる聲と言葉とである。

この微妙な生きものを耳に捉へる爲のみにも、街路は私にとつて山や海に劣らない魅力を持つ。日本橋あたりの交叉點に立つ。電車とトラックと鐵骨をうつ空氣ハムマアとの未來派的渦流音の中にまき込まれつつも、漠然と、

しかも確然と湧き上る群集の聲の不協和音は、何といふ心をそそる音だらう。まつたくそれは下手な交響樂のアレグロ・アツサイどころの及ぶところでない。さういふ綜合音の中から、きら／＼と生きた言葉がきこえて来る、川瀬に光る小魚の銀の腹のやうに。

そな大袈裟おほげさなものに限らない。ふとした街角の通すがりに、二人の細君同士の口から出て、何の話のつづきか耳に残して行つた言葉、例へば、『……まつたくねえ……』といふやうな一語の、何といふ詩に充ち満ちてゐる事ぞ。

それはその言葉によつて話の思はくを想像したり、人物の位置を推察したりするやうな散文的な餘裕ある聞き方によるのではない。ただその一語そのものから直接に打つて来る魅力である。これが語感の單位である。この語感の單位を基礎に保持しながら、その上に言葉の意味が加はつて来る。(中略)

『……新年おめでたう……舊冬中はいろ／＼……また相變りませず……』と

いふ舊式な年頭の挨拶の抜きさしならない表現は、まるでルコント・ド・リイルのスティールを思はせる。

私は東京で生れた者の癖として東京の方言しか知らない。諸國の方言に通曉しないが、通曉しないことが又一種のエキゾチックな美を感じさせて、それら諸國の方言からそれ／＼の語感を強く受ける。兵庫縣の詩人坂本遼君の詩を見ると、この生きた言葉をはつきり擱んで寸分の無駄もない。

……

お鶴がながい間飼うた牛は

おらの旅費に賣つてしまうた

おかんとおらは牽かれていく牛見て涙出た

佛になつとるお鶴よ

許してくれよ

おら神戸へいて働くど

この生きた神経はそれだけでも詩の妙致に徹してゐる。生きた言葉を感じ得る力が一つのカリテエなのである。人のしやべる言葉をそのまま描出したところで、それは單なる描寫に過ぎない。そのしやべる言葉の中から本能的に生きた言葉の語感を感じる事から始まるのである。其處に無限の深さ的確さが生れる。其處に新鮮極まる詩が伏在する。詩人が生きた言葉の語感に何等の傾きを持ち得ないとしたら實に惜しい。詩人が人造した言葉も興味饒おほほいものであるが、結局のところ、自然の中に睡る貴重な新しい生きものを起たせて、之に使命を曉さらせる方が源が遠く深い。素より唯方言を採用するといふ事をさしてゐるのでない事は自明であらう。(中略)

詩は無限なのだから何處からでも生れる。花園の花からでも、造花屋の花からでも、瓢箪からでも、吐月峰からでも。詩の言葉は原稿紙の罫の間から

も生れるだらう。典謨訓誥からも生れるだらう。街路に落ちてゐる生きた言葉からは確に生れる。感ずる心が無ければ言葉は符牒ふだに過ぎない。路傍の瓦礫の中から黄金をひろひ出すといふよりも、むしろ瓦礫そのものが黄金の假装であつた事を見破る者は詩人である。又離ればなれになつて活社會の生活のくまぐまに隠れてゐる特殊語を呼び集め、引き合せ、仲よくさせ、一番確かな地盤の上に有機的に生活させ得る者は詩人である。語格を自知する觸覺もくかくを鍛へて、いたづら好きな自然の生み出す有り餘る時代語に百發百中の銛もりをうつ者は詩人である。更に又咄々と口を衝いて出る喧寒の凡語そのものに創造のよろこびを知る者は詩人である。

なぜといへば、生きた言葉を掴む悦びには、その事が既に創造の悦び屬し、生きた靈肉の同意語に外ならないからである。人間の在る所詩は常に澎湃する。

ことばにたいするかういふ心がまへは、ひとり詩人にだけ必要なものではありません。すべての文學にたづさはる人々にとつても同様に必要なのであります。

前の引用した文章のなかに方言のことが出てゐますから、そのことについて少し述べておきましょう。最近、方言つまり地方のことばを、ことに小説の會話などに使ふ傾向が多くなつて、さういふ作品がかなり目立ちます。方言といふものは、地方々々の生活と密接に結びついてゐることばで、特殊な魅力を持つてをり、そのために作品をある場合には非常におもしろくもします。ことに地方出身の作家は、さういふ方言の世界にそだつてきたのですから、方言が身についてをり、自分自身のことばになつてゐるわけです。だからそれを使ふといふことは、自分にとつて一番適切なことばを使ふことになつて、その結果表現に生き生きとしたさ加へることもなります。しかし文學は單に一地方のもの

いふ限られたものではありません。すくなくとも日本國民のもの——今後ともつと廣く大東亞民族のものとなるでせう——であります。さうすれば日本國民にとつて共通なことば、すなはち標準語であらはずのが文學としては本格的であるといはなければなりません。しひて方言によらなくても、農民の生活なり、地方の特色なりはいくらでも表はせるものです。したがつて、文學に志すものはどうしても標準的な日本語を自身のものにし、それを實感を以て驅使することができるやうに努力しなければなりません。それは文學のために必要なばかりでなく、りつばな國語をそだてるといふ點からいつても非常に大事なことです。文學は一國の國語に大きな影響力を持つてゐますし、日本の國語はもつともつとみがかなければならぬのです。さういふ役目も文學は持つてゐるわけです。

さてそれで大體文學とことばとの本質的な關係については述べたことになり

ますが、つぎにことばにたいする二三の注意を書いてみませう。

まづ第一に、いろいろなことばをたくさん知るやうにすることが大事です。それにはまづわれ／＼の日常のことばに絶えず注意を向けてゐることが必要です。前に引用した高村光太郎氏のことばにもあるとほり、生活のなかにとけ込んでゐることばには、生きた美しいことばがたくさんあります。それから何といつても讀書です。書物のなかには昔から今までのいろいろなことばが豊富にありますから、讀書によつていろいろなことばを知ることができます。辭書を引くことも大事です。イタリヤの文豪ガブリエル・ダヌンチオは、つねに辭書を讀んでいろ／＼な單語に目をさらし、そこから作品の著想をさへ得たといふことでありますが、それほどでなくても、絶えず辭書に親しむことは、ことばを豊富に知ると同時に、ことばの正確な意味、用法を知ることができて、非常に有益です。

第二には、さういふいろ／＼なことばをたゞおぼえてゐるといふだけでは不十分で、それらをほんたうに自分のものにして使ひこなせるやうにしなければなりません。たとへば日本語には敬語といふものがあつて、それがかなりむづかしいものですが、ふだんにさういふものを使ひなれてゐなければ、小説の會話などうまく書けないことになります。たとへば「參ります」といふことばは自分の行爲をわざとへりくだつて使ふものなのに、「先生が參りました」とか、「先生はいつ東京へ參りましたか」などといふのは、敬語の使ひ方になれてゐない證據です。「申しました」といふことばも同じやうで、それを「先生がさう申しました」などといつて平氣でゐるやうではいけません。とにかくふだんから正しいことばの使ひ方になれるやうに努力することが大事です。

第三に、なるべく分かりやすいことばを使ふやうにすることが大事です。漢字もできるだけやさしい漢字を使つて、むづかしい漢字のことばは、なるべく

かな書きにするなり、かな書きにしては分からない場合にはほかのことばに書きなほすやうにすることです。このごろは特に、やさしいことばですむところをわざ／＼むづかしくいつたり、むづかしい漢字を使つたりすることが流行のやうになつてゐますが、これは決していいことではありません。「このごろは物があがりまして」といつてすむところを「物價騰貴の今日」といつたり、「わざと」を「意識的に」、「知つてゐた」を「意識してゐた」、「きゝめがある」を効果的である」といつたりするやうなのは、自分の學問や知識を鼻にかけるやうなもので、たゞキザな感じをあたへるだけです。昔唐の詩人白樂天は自分の詩を発表する前に、その草稿を無學なおぢいさんやおばあさんたちに讀んで聞かせわからないといふところがあつたら、わかるまで徹底的になほしたといふ話があります、文學に志す人はそのくらゐの覺悟を持たなければなりません。

戦地の兵隊へとどいた軽い慰文袋

あけてみればなんのこと鉛筆一本に手紙
たどたどしい子供の手で書きつづつた文言

私のところは兄さん二人が出征してゐます

家が貧乏でなにもあげられません

鉛筆一本送ります

もらつた兵隊は聲をあげて泣いた

遠い遠い支那の戦場で

これは中勘助氏の戦争詩の一つですが、むづかしいことばは一つも使つてゐません。それでしかも讀む人の心を強くうつて涙をこぼさせるやうな力を持つてゐます。もう一つやさしいことばで書かれた詩をあげてみませう。

僕たちは足踏をしてゐる

——僕たちの朝會の詩

僕たちは足踏をする。

さむい朝の校庭で、

みんな歩調を合はせ、

どつし、どつしと

日本の土を踏む。

——僕たちの國旗が、たかく揚がつてゐる。

僕たちは足踏をする。

女の子も、一年生も、

みんな腕を組んで、

どつし、どつしと

日本の土を踏む。

——僕たちの日の丸が、たかく揚がつてゐる。

十二月八日、

僕たちの荒鷲が太平洋を翔びこえた朝も、

僕たちはここで足踏をしてゐた。

どつし、どつしと

日本の土を踏んでゐた。

——僕たちの國旗がたかく揚がつてゐる。

この足で日本の土を踏みかため、

東亞の地ならしをするために、

僕たちは今朝も足踏をする。

みんな

しつかりと足踏をする。

——僕たちの日の丸が、たかく揚がつてゐる。

いつでもお役に立つやうに、

いつでもすぐにとび出せるやうに、

僕たちは今朝も足踏をする。

みんなで、しつかり

足踏をする。

——僕たちの國旗が

たかく、たかく揚がつてゐる。

わかりやすいことばで書くといふことは、別のことばでいへば、耳できいてもわかるやうに書くといふことにもなります。學問的な文章ではさうばかりもゆきませんが、すくなくとも文學の上ではさういふことができるはずです。

人間の感情や情緒などは、むづかしい表現よりも、平明な、單純な表現によ

つてあらはされることの方が多いのです。さういふ細かな氣持を平明にあらはした例として和歌を二三あげてみませう。

瓶にさす藤の花ぶさ短かければ

疊の上にとゞかざりけり (正岡子規)

たまさかに吾を離れて妻子らは

茶をのみ合へよ心休めに (島木赤彦)

秋さびし物のともしさ一本の

野稗のびえの垂穂たひほ瓶にさしたり (古泉千樞)

いづれも病床における實に細かな感情を、しかも平明に表現しえて、餘すところがありません。

もつとも文學にはむづかしいためにかへつて趣のあるといふやうなものもないではありません。たとへば泉鏡花とか幸田露伴の小説の表現はそれです。そ

それはそれで十分に美しいものでありますが、しかし一般的といふことはできません。ことに今後の日本文學はしだいにやさしい平明な表現をとつてすゝむやうになるものと思はれます。

またわかりやすいことばだといつても、かならずしも現代の口語でなければいけないといふこともありません。小説や評論はほとんど現代語で書かれますが、詩や和歌や俳句のやうなものでは、ある程度まで古語、あるひは文語を用ゐることは一向さしつかへありません。現に古語を驅使して、効果をあげてゐる詩人もすくなくありません。

み軍はみなみにすすみ

西東一萬海里

天つ日の光直射す

海原に陸に小島に

日のみ旗なびかひゆかす

しのびつつ初夏の野に

ほととぎす啼きわたる日を

ひなさかる相模乙女が

うたうたひいく日かつめる

これはこれ梅のまろ實ぞ

しろたへの富士の高嶺を

まなかひにふりさけあふぐ

畑なかに香もかぐはしく

花さける梅が枝のうめ

青梅のつぶらつぶらを

家々にとりあつめたる

ひろ庭に蒔しき干し
紫蘇の葉の色にも香にも
けざやかにめでたく染めし
これはこれ里のほまれぞ

これは「梅の實——相模乙女に代りてうたへる——」といふ、三好達治氏の詩の前半であります。古語の單語および言ひまはしがたくみに用ゐられて、美しいリズムをなしてゐます。

しかしその場合でも注意しなければならないことは、不必要に古語をとりいれるといふことです。あるひは自分の實感のともなはないことばを、たゞそれが古語であるといふ理由だけから使ふといふことです。さうなると、ことばの遊戯におちいる惧れがあります。

第四に、ことばはできるだけきりつめることが必要です。つまりむだなこと

ばを使はないことです。あまりおしやべりにならないことです。ことに「寂しい」「美しい」「悲しい」などといふ形容詞はあまり使はない方が、かへつて表現に力をあたへます。さういふことばを使はないでも十分に、美しい感じなり、寂しい感じなりを出すやうになることが大事です。

第五に注意しなければならないことは、不必要に外國語などは使はないやうにすることです。これはむづかしい漢語、漢字を使ひたがると同じで、わるい傾向です。もつとも必要なものは仕方ありません。それをしひて漢語になほして、たとへば「スキー」を「雪艇」、「バター」を「牛酪」、「チーズ」を「乾酪」、「レコード」を「音盤」、「トーカー」を「發聲映畫」などといふ必要はありません。それらは「パン」「ペン」「インキ」「マッチ」「タバコ」「シャツ」「ランプ」「カルタ」「ビール」「コーヒー」などと同じやうに、すでに日本語のなかに消化されてゐるものです。さういふものはやむを得ませんが、そこまでこなれてゐない

ものをむやみに使ひたがるのは、やはりキザです。里見弴氏がつぎのやうな例をあげて外國語をむやみに使ふことの弊をいましてゐます。だれが見てもこんなのをいゝ表現とは思はないでせう。

「僕のフレンド（友だち）が、箱根にヴィラ（別荘）をビルト（建てる）したんだがね、ちよつと小高いマウンテン（山）の上で、ヴェランダから、サウス（南）の方へスロープ（傾斜）になつてゐる。そつちの景色が、とてもピクチャレスク（繪畫的）でね、殊に、フォギー（霧ぶかい）なモーニング（朝）なんぞ……」

このなかでやむを得ない外國語は、「ヴェランダ」ぐらいなものだ。今までの歐米崇拜から、歐米驅逐にかはつた今日では、もはやこのやうなばかげたことは行はれなくなるでせうが、それでもまだよく外國語の使はれる傾向はかなり強いやうです。

ことばについていふことはまだ／＼たくさんありますが、とにかく文學にとつてはことばは大切なものです。文學に志すほどの人は、まづ自分の語ることばなり、書くことばなりを豊富にし、正しくし、洗練するやうに力めることが肝要であります。

俳句入門

第一章 俳句の本質

一 俳句の形式

俳句とは、どういふものか。くはしいことは、わからないが、一句や二句の俳句を知らない者は、まづ無いといつても、過言ではないでせう。「古池や蛙飛び込む水の音」は何ですか、と問はれて、即座に「これは俳句だ」と答へられない人は、恐らくないに違ひありません。

それほど、俳句は、人に親しまれ、また古くから傳へられてきたものなのです。

これから、諸君に最も親しみ深い句を擧げて、少しくくはしい研究をしてみたいと思ひます。

古池や蛙飛込む水の音

芭蕉

朝顔に釣瓶とられてもらひ水

千代

繰りかへし讀んでみますと、共通な點を、知ることができます。すなはち、いづれも五音、七音、五音、合計で十七音の形を成してゐます。つまり、俳句は五、七、五の十七音から成立してゐる詩であることを知ります。和歌は、五、七、五、七、七、の音數からできてゐる三十一音詩であります。音數は、ことなりますが、一定の形式を持つた詩、すなはち定形詩であることは、同様であります。では、俳句は何故に十七音でなければならぬかといふ疑問が起るに違ひありません。この問題については、從來、學問的にも種々の議論もあるのです。

が、元來、俳句といふものは、和歌から連歌へ、連歌から發句が獨立して、今日の俳句の源をなしたものでありますから、その發生的原因は遠く、かつ深いものであります。例へば、國民性とか、國語とかいふ問題にまでさかのぼらねばならないのであります。

しかし、今こゝでは、とにかく、俳句が成立して以來この方、一般的に十七音としてみとめられ、かつ使用されてきた事實と、またこの事實を通して、この形式が最も庶民文學として親しみやすく、その上一句に感情を十分に詠ひえられる結果、今日の不動の形式として、傳承されたものだと考へていたゞけばよろしいかと思ひます。しかしながら、この十七音においても、破調とか、字餘りとかいつて、特に内容上やむをえない場合には十七音の形式が、破られることも、許されてゐたのであります。これも、もちろん、無制限に許されるといふわけではありませんので、あくまでも、十七音といふ形式ではあるが、一

音ないし二音、多くても三音程度に限られてゐるのでありまして、あまりこの形式が自由に變へられますと、俳句とは別個な詩形が作られ、したがつて俳句の領域を乗り越えるといふ結果になつてしまふからであります。

破調の例を、二三擧げてみます。

芭蕉野分して盥に雨をきく夜かな 芭蕉

馬に寝て殘夢月遠し茶のけぶり 同

更衣いまだ風をとりつくさず 同

現代俳句からも引用してみませう。

北風荒れて帆綱の軋り寝ても聞きぬ 誓子

來ておどろく軍港の冬あたゝかき 同

枯れし木と激戦のときの壁立てり 同

父となりしか蜥蜴とともに立ち止る 草田男

馬は見ず早の犬の眼吾を見たり 同

外套の釦手ぐさにたゞならぬ世 同

要するに、俳句は、原則として、十七音數の形式をとるといふことは理解されたことと思ひます。

二 季語について

俳句は、十七音の形式をとることは、理解されたが、なほ、著しい特質を具

へてはゐないでせうか。

古池や蛙飛込む水の音

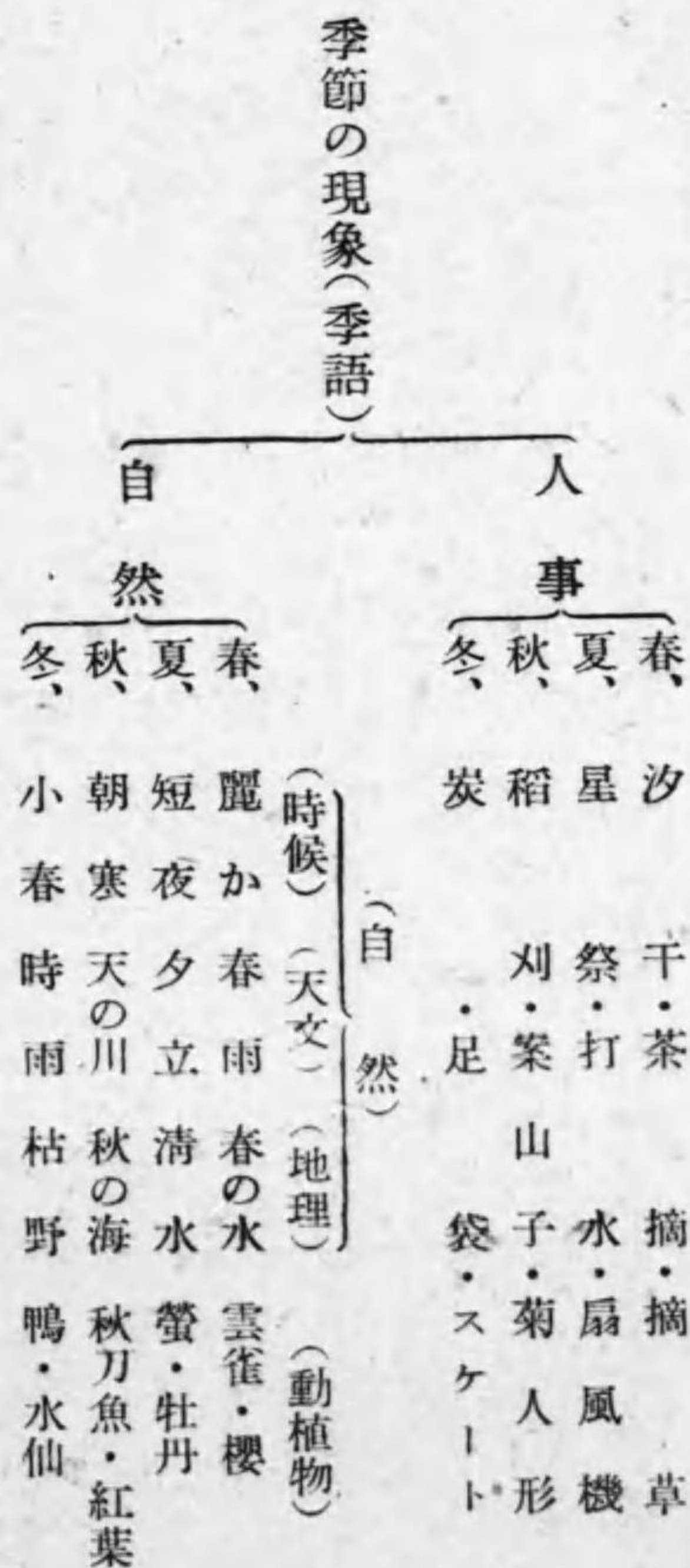
この句は、何から成立してゐるかとみますと、古池であり、蛙であり、水の音であります。この三つの要素が、一體、われ／＼の生活と何のかゝりがあるのでせうか。一見して、この疑問は、當然なことでありまして、人間生活ないし社會に關した事象は、直接には、何も取扱はれてをりません。取扱はれてゐるのは、自然の現象であります。すなはち、蛙が池の水の中に飛びこんで、寂然とした天地の靜寂を破つたといふことだけなのです。しかし、この場合にこのまゝでは詩になりませんが、詩としての俳句となつてゐるのは、作者芭蕉のこの現象に對する感慨が、この句の内奥に盛られてゐるからであるといふことはいふまでもありません。

かやうに、自然現象は詠はれてゐますが、自然現象にあつても、御承知のや

うに、日本の國土は、春夏秋冬の四季が、はつきり區分されます。では、この句の自然現象は、この四季のどれに屬するものでせうか、古池でも、水の音でも、この自然現象の四季は、表象されてゐません。この句の一要素「蛙」のみは、明らかに、夏季であることを表象してゐるのであります。この季節を表象する蛙の存在によつて、この句の古池も、水の音も、大きくは自然現象も、作者の情感さへも、季節の聯想によつて明瞭にされてくるのであります。してみると、この句の生命は、少くとも「蛙」にあることを知ります。このやうに、俳句は、内には、作者の感情を包藏してゐますが、外見には、季節を詠ふ詩であるといふことができます。

「蛙」のやうに季節を表象する語を、俳句においては、季語といひます。くはしくいふと、俳句における季語とは、四季の自然や、生活のなかで、俳句の題として詠むことができるもので、簡明に表はされた語であるといふことができます。

ます。いま自然や生活のなかでといひましたが、四季の移り變りそのもの、あ
るひは、移り變りによつて起るすべての現象でありますから、もちろん自然界
のみに限らず人間界のうちにもあるのであります。このやうな俳句の季語を表
によつて例をあげてみませう。



では、季語は何故に俳句にとつて必要とされるのでありませうか。この規則

ともいふべきものは、あたかも、形式の十七音と同様に、誰のきめた規則でも
ないのであります。自然成立して、そして古くから守られ、傳承された事實
のみがあるのであります。しかしながら、その必要な理由も、もちろん指摘す
ることができるのであります。前にも述べた「蛙」の存在のために、聯想が
呼び起されるのも、確かに、存在理由の一つに違ひありません。以下少しくこ
の點について述べてみませう。

由來日本の國土は、温帯に在つて、春夏秋冬の四季が、明瞭に區分されま
す。このやうな國土に生成發展した日本人の性情が、この四季のなかに培養さ
れ、純化されて、自然への愛情と感觸が、一段と深まつていつたといふのは、
自然の理でありませう。その結果、日本人が、自己の感懷を述べる場合にも、
この自然の變化、あるひは自然そのものをとほしてすることを好むのもまた當
然でありませう。このやうな日本人の性情ばかりでなく、俳句の形式は、十七

音といふ、日本において、いな恐らく世界において、最も短い形式であります。和歌が、三十一音であるに對して、僅かに十七音であります。

この最短詩形を借りて、四季の移り變りそのものだとか、あるひはこの變化によつて起る、自然界、人間界の現象を詠嘆するのでありますから、感情をそのまま表現するわけにまゐりません。極度に感情を壓縮し、凝結し、昇華させて、十七音の形式に收め、しかもその句からは十七音の形式を乗り越えて、その感情を無限に擴大させなければなりません。言葉をかへていへば聯想性、暗示性、象徴性を持たせることが、實に俳句の生命ともいひ得られるのであります。この効果を最もあげるには、何よりも、季語の利用を俟つほかはありません。季語が、古來から鐵則のやうに使用され、今後も利用されるといふのは全く俳句の性格と、日本人の性情とが、融合された結果ともいふことができます。ありませう。

季語が、いかに利用され、いかに暗示性、聯想性、象徴性を持つてゐるか、二三の例を擧げてみませう。

古池や蛙飛込む水の音

芭蕉

行春を近江の人と惜しみけり

同

日くるゝに雉子うつ春の山邊かな

蕪村

これらの句における季語は、「蛙」であり「行春」であり「春の山」であります。蛙のことはすでに述べましたが、行春は、春もまさに終らうとしてゐる頃であります。櫻もいつか散つて、青々とした葉が、天地をおほひはじめます。空のごつた不透明も、徐々にぬぐはれて、五月のあの紺碧の深い空に塗りかへられようとしてきました。人の心も、うき／＼したのから漸く落ちつきをとりもどして、澄んだ、しかも秋とは異なる躍動を帯びてきました。このやうな自然の移り變りに、心から、春を惜しむ氣持になるのであります。ちやうど

この頃芭蕉が、近江を去るに當つて、親しかつた人々と別れを惜しんだのであります。芭蕉の心情が、躍如としてこの句に表はされてゐるのも、行春の情景ゆくはるなくしてはくはだてがたいものでせう。

蕪村の句における季語は、「春の山」であります。春の山でありますから、ものさびしい秋でもなければ、枯色一面の冬でもなく、やける夏の山でもありません。あまり高くない山は、春のおとづれに、草も木も青々となつて、花さへ隠見するのです。人の心も何か、うき／＼した、解放された、のどかさを感じます。この氣持を突如、打破つて聞えたのは、雉子を撃つた銃聲でした。永い春の日も漸く暮れかゝつてきました。春の日永の情景が、まことに巧みに描寫されてゐる句であります。

このやうに、季語は、四季の感情を明瞭に表はし、それによつて、俳句の情景が、浮び出し、聯想は擴げられ、同時に作者の情感と渾然と統合されて、暗

示の世界へ限りなく追つてゆくのであります。今かりに、蛙、行春、春の山を他の言葉にかへてみたとしたらどうでせう。

およそこれらの句の情景も、情懷も、全然異なつたものになつてしまふでせう。季語の効果といふか、重要性といふものは、ほゞおわかりになつたことと思ひます。

季語は、このやうに重要でかつ効果のあるものであります。永久不變に、その重要性和効果があつたものではありませぬ。多くの季語のなかには、時代の變遷とともに、生起してくるものもありまして、過去の存在性も、現在は、否定されるものもあります。殊に四季の移り變りそのものよりは、移り變りによつて起される自然界や人間界の現象に、多く見受けられるのであります。限らない人智の進歩には發明發見があり、交通の發達によつて世界の文化が、自由に交流されますので、俳句の上にも、これらの影響はさげがたく、新

しい季語が生まれる一方、また従來の季語が、捨て去られるのも當然なことであります。われ／＼は少くとも現代に生きゐるのでありますから、現代の俳句を作らねばなりません。季語の使用もこの點を自覺して、現代生活から生まれる適當な、好ましいものを利用することが緊要であります。

およそ生活から遊離した俳句は、單なる遊戯であります。十七音の形式に、現代生活とはかゝはりない季語をあてはめて、何のための俳句でせう。自己の生活から、自然を眺め、四季の推移に心を寄せて、傳承された季語を鵜呑みにせず、十分に検討、理解して取捨よろしきを得ることが必要であります。

新舊季語の二三の例を説明しませう。

(1) 廢すべきもの

(イ) 出代(でがはり) これは、歳事記さいじきによれば京阪地方の舊習をまもる

家では、四月に婢僕の交代てがはりすなはち出代でがはりが行はれてゐるといふので、春の

季語として、取扱はれてゐますが、かういふ習慣は、現今、ほとんど行はれてをりません。したがつてこの季語は、昔行はれてゐた時代にのみ存在價值はあつても、現在においては、少くとも廢さるべきであります。

(ロ) 起し繪(おこしゑ) 繪畫を切り抜いて、芝居の舞臺面の如く奥を狭く口元を廣く組み立て、燈火を點ずる仕組みにした子どもの玩具で、歳事記では、夏の部に入れてありますが、時代はすでに變つて、現在の若い人たちにとつてはほとんど、想像もできないものであります。この季語も當然現代のわれわれの句作上には、無用の存在といつてもよろしいでせう。

(ハ) 屏風びんぶう、障子しょうし いづれも冬の季語として、取扱はれてきました。しかし實際においては御承知のやうに、冬のみに使はれてはをりません。殊に屏風びんぶう、金屏きんびん、銀屏ぎんびんもあります)は、一般の家庭では、あまり多く用ゐられませんし、使はれるのは、相當な家庭とか、特殊な家庭(例へば畫家、書家)または神社、

佛閣ないしは料理屋のやうなところであつて、しかも、この場合は、冬季に限らず、ほとんど一年を通じて使用されるのでありますから、今では屏風のために、特に冬の季感が起るといふことはないのです。

つぎの句は、現代の有名な作家の、屏風を季語として作られたものでありますが、季語の問題からいへば、無理があるのではないかと思ひます。

くらがり七賢人の屏風かな 誓子

ともしびを剪れば明るき屏風かな 風生

金屏や筆もとらずに小一年 虚子

また障子にいたしましたも、まづ、夏季の間ぐらゐが、とりはづされるのにすぎません。それにもかゝはらず、冬季の季語を興へるといふことは、無理だといふほかはありません。

なほ、吟味すれば、考究すべき季語が多いであります。要は、死ん、季語

は、いさぎよく廢し、俳句が、季語を必要とする根本的な理由をゆがめず、遊びに墮せず、俳句をして、詩の領域から守ることあります。

(2) 新季語の例

(イ) キャムプ、砂日傘、濱日傘 今さら説明するまでもないことと思ひます。夏季になりますと、海邊に、山に、湖畔に、幾日間の糧食をリュックサックにつめて、輕装した肩に小さなテントをかついで出かけます。そして自然の抱擁のなかを、溪流に米を洗ひ、雑木林から薪を折り取つて、飯盒でかしぎ、食事を取り、自然のなかの生活をすごすのであります。生活そのものが、すでに詩でありまして、精神生活においても、純化され、若い時代の、楽しいなつかしい思ひ出ともなるのであります。

美き雲にかづちのゐるキャムプかな

誓子

嶽麓山中湖

キャンプの火燃えて夜となる湖畔かな

斌 雄

濱日傘も、夏の海邊に、ジリ／＼と照りつける日光をさへぎるために砂のなかに柄を突きさして、その下に身をいこはせ、ひろ／＼とした水平線をはるかに眺め、あるひは、寄せては返す波をみつめて、想ひを、いろ／＼にはせることも、夏の海邊の楽しい一時であります。殊に濱日傘の千紫萬紅ともいふべき、色とり／＼の意匠をこらしたものが、海邊に林立するさまも、まことに美しいものであります。

砂日傘小犬がく／＼りあるばかり

たかし

砂日傘黄色の女よこたはる

斌 雄

(ロ) スキー、スケート スキーも、スケートも、生活のなかから生まれたもので、決して新らしいものではありませんが、生活上必要でない人までも、盛んに興味をそゝられるやうになつたのは、近來のことです。殊に、オ

リンピック競技にも、またわが國の冬季競技の選手権大會にも、この種のものがあるので、いつそう盛んになつたといつてもよろしいでせう。

かういふ専門家ばかりでなく、一般の人でも愛好するやうになり、冬季には、スキー列車さへ運轉されるほどです。のみならず、近代の戦争には、スキー部隊の活躍も、見のがすわけにはゆきません。ソ芬戦争において、フィンランドのスキー部隊が、ソ聯の猛攻をよくくひとめたといふことは、當時の新聞紙上の報ずるところでした。このやうな、あらゆる方面に、利用されるスキーであります。われ／＼が好んで、スキーを驅るのは、あの白皚々たるスロープを雪煙をあげて滑走し、また樹林を縫ふ爽快さを、あるひは、青く澄んだ日空のもとに、ヒュッテにひるがへる日章旗に、何か涙ぐむ感激を、忘れることができないからであります。そこには、純粹な精神があり、詩があります。

スキー長し改札口をとほるとき

左 右

スキー穿く旗風天に鳴りやまず

斌 雄

スケートは天然の氷上をすべる場合と、人工の氷上をすべる場合がありま
す。箱根芦の湖、諏訪湖、近くは奥多摩などは、天然でありますし、また都會
にあるリンク場は、人工的のものであります。眞のスケートの情趣を味はふに
は、やはり天然のものがすぐれてゐます。山にとりかこれた自然のなかのリン
ク場に、縦横にすべる爽快さは、スケートにのみ許された情趣であります。

スケートの紐むすぶ間も逸りつゝ

誓 子

スケートの眞顔なしつゝたのしけれ

同

以上は、ごく僅かな例であります。要するに、われ／＼の近代生活からは
常に新しい季物が現はれ、そして、それが新季語として活用されるものである
といふことを知ることができれば足りるのであります。

こゝで一言、俳諧歳事記について述べませう。これは、今までに述べてきま

した季語を、全部あつめて、これを天文、人事、植物、動物といふやうに、分
類して四季に編輯したものであります。でありますから、俳句を作る上に、季
語にはどんなものがあるかといふことを知るに、非常に便利なものでありま
す。また俳句を作るといふことから始まらず、興味あるものであります。

三 俳句の作り方

俳句の作り方とか、作法といつても、要は俳句の本質をつかめば、おのづか
ら道は開けてくるものであつて、一朝一夕では、容易に知ることができませ
ん。すでに俳句の本質については、概略述べて置いたところで、諒解されたこ
とと思ひますが、さらに進んで種々の長い修練を経て、はじめて、俳句の本質
をつかみ得る時があるでありませう。

まづ俳句とは、どんなものかといふことが一應わかれば、それに似たやうなものが先づできるはずであります。いまこゝに作句法を説いたからといつて、必ずしも直ちに、諸君の俳句が、りつばにいとやすくできるといふことはないのであります。作句法は、たゞ俳句を作る上の参考であり、道しるべにすぎないのであつて、何よりも最も重要なことは、作者の詩情といふか、詩精神といふか、感情のひらめきにあるのでありまして、今後將來においても、この精神をより高度にたかめてゆける者のみが、すぐれた俳句を作り得るものだといふことができませう。この精神を高度にたかめるといふことは、詩精神の錬成であり、藝術精神の涵養かんやうであつて、そのためにはすぐれた作品を鑑賞すること、自然のなかで精神の純粹化に努めることが必要であります。もちろんこれらの點においても、天分といふこともありませうが、たゆまざる努力の必要であるといふことは、獨り俳句の道ばかりではありません。このやうな修練は

それ〴〵の境遇に應じ、最も適當な方法をとつていたゞくことを希望するのであります。實際問題として、俳句は、作るといふよりは、生なまれる俳句でありたいのであります。俳句作家の苦心は、俳句を作る時にありますが、常にその作る心がまへが必要でありまして、心の準備さへあれば、その時その場にのぞんで、俳句は生まれてくるのであります。ものの美を感じるその純粹な精神は、ものに觸れて、思はず吟ぜざるを得なくなるに違ひありません。この心境に到達することが、俳句の上ばかりでなく、われ〴〵一般の生活にも缺くことのできないものでありまして、俳句と生活は、渾然一體となるといふことができませう。以下俳句は、どんなふうにならるかを、説明してみませう。

(一) 題材について

題材は何でもが、なり得るものだといつても決して誇張ではないでせう。自然、動物、植物、あるひは、一般日常生活の何でもよろしいのであります。問

題は、これをいかにとらへるかが重大なのであります。題材そのものの羅列は報告を出でないことが多いでせう。あくまでも題材のいかに關らず、詩眼を開いて、句に表現することに努めねばなりません。

(二) 俳句を作る態度

俳句を頭のなかだけで作ることは、好ましくありません。いろ／＼な記憶を呼び起し、想像した句は、よほど成功した場合のほかは、感激のうすいものとなります。ではいかなる方法をとるかと申しますと、畫家が題材をえらんで寫生するやうに、あらゆるものを寫生することです。対象となるものを、鋭く細かく、あらゆる角度から眺め、感動の起るにしたがつて、俳句に作つてゆくのであります。前にも述べたやうに、的確に精密に対象をつかんでも、たゞそのまゝの表現では、單なる寫真にすぎません。寫真でよろしいなら寫真機の方がよほどとりつばに、まちがひないものが得られるわけです。しかし俳句は、藝

術でありますから、作者の魂を入れなければ、俳句の生命はできません。したがつて、俳句作者は、対象から作者の感情のひらめき、言葉をかへていふと感動ともいへるでせうが、この作者の感情を作品に詠みこむので、対象が、そのまゝに俳句にはならない場合もあるわけです。作者は、一つの対象からいろいろの感情を受取ることになり、この感情のかゞやきの程度が、結局、句の優劣を定めるといふことにもなります。このやうな感情は、誠に重要なものに違ひありませんが、景色と申しますか、情景といふものは、決して俳句から除外することはできないのであります。なぜならば、この情景を除外しますと、この感動が、何のために起つたか、凡そ分からないものになつてしまつて、強い印象を與へることができません。しかし、情景を描く場合には、やゝもすると感動を端的に表はし得ませんから、感動が、力弱いものになります。したがつて情景を表はすと同時に、感動を弱めず端的に表はすには、情景の描寫であつ

でも、内的には、感動をこめたものを詠ひ出すことが必要です。このやうな注文は、まことにいふことはやさしいものでありますが、實際問題としては、なか／＼困難なことであります。これには、多くの修練をへなければならぬのですが、たゞ作句の精神として、かくあるべきものだといふことを心がけておいていたゞきたいのであります。

(三) 實例

(1) 芭蕉が越後に旅をした時であります。ある夏の夜、海上遠く佐渡ヶ島が、夜目には、見えるか、見えぬかに浮んでゐます。半天には、銀河が、夢のやうに横たはつてゐます。芭蕉は、何か、旅の心に、切ない氣持を感じないではゐられません。しばし、足をとめて、なほ、空をうち仰いでゐると、佐渡ヶ島が、昔から、遠島に利用されてゐたことに、ふと氣づき、多くの遠流された人々の身の上を想ひめぐらして、當時のその人々の悲しみと愁へと心に心の奥ま

でも揺り動かされて、同じやうな感情のわきおこるのを、どうすることもできなかつたのです。

荒海や佐渡に横たふ天の川

芭蕉

芭蕉が、心をこめて詠ひ出たのが、この句であります。日本海の波高い情景を、荒海と表はしたのであります。たゞこの場合に、見のがすことのできないのは、波高い事實の景色の内部には、心の荒涼さが、ひそめられてゐるといふことです。この句の季語は、「天の河」であります。天の河は、「銀河」とも、「銀漢」ともいわれます。

(2) 今宵は十五夜です。めづらしく晴れ渡つた空に、十五夜の月を眺めるには、またとない絶好の機會であります。淺草雷門から玉の井行のバスを拾つて十數分もすると隅田河畔の百花園前につきましたので、今夜は、こゝで月を賞でようといふわけです。今夜は特に九時まで開園されるさうです。園内には雪

洞が立てられ、虫の音も聞えてきます。風雅の人々はすでに月を眺めようと集まつてきてゐます。秋の草にはいつしか、露がおりてゐます。東の空が、だんだん明かるくなると、やがて團々とした月がポカリと浮かびあがりました。江戸の昔もしのばれるやうな光景です。人々は、そぞろ歩きながら、聲もひそやかに、月を賞してゐます。まことに静かな夜です。

名月やくさむら揺るゝこともなし

くさむらのしげり冷く望の月

こんな句ができました。「望の月」とは「名月」の別名です、ふと池の前に出ました。樹影が、月光をさへぎつてゐます。もつと月がのぼれば、池も明かるくなるでせう。

名月や蓮池いまだくらきまゝ

名月はいよ／＼中天にのぼりつめて、人の群も次第に、潮の引くやうに去つ

てしまひましたが、なほ、名月を惜しむ人は去りがたい様子であります。門限もせまりましたので、名残惜しくも私も門を出てまわりました。今夜のくはだてが、何かすが／＼しい氣持となつて残つてゐるのを感じるのでした。深川の草庵で、芭蕉が、やはり今宵のやうな名月を、感情こめて詠つた句があります。もちろん前にかゝげた試作とはくらべものになりません。

名月や池をめぐりて夜もすがら

芭蕉

(3) 春の陽が、うら／＼かに照り渡つてゐる晝の頃です。道のべには、菜の花が、黄色に咲き誇つてゐます。蝶は、花から花へと、ほのかな春の風に吹かれるやうに飛んでゐるのが見受けられます。何とのかかな春の日でせう。と海の潮騒が、耳にひびいてきました。蕪村の藝術的衝動は、呼びさまされて、口ずさまずにはをられませんでした。

菜の花や晝ひとしきり海の音

この句には、春といふ字句は用ゐてありませんが、菜の花で、春であることを知ることができませんし、また作者が、海に近い道を歩んでゐたことは、海の音でわかるのであります。

(4) 春もなかばから終りにかけての頃でありませう。日の光も次第に強さを増して、海面から山櫻に、照りつけてゐます。櫻の花は、白銀のやうにまばゆくかゞやいてゐます。見事な景趣です。諸君でしたら、一體どんな句を作られるでせうか。

海の陽にまばゆく咲ける山櫻

こんな句はどうですか。しかしよく考へてみると、咲ける山櫻は、單に山櫻だけで、咲いてゐる山櫻を十分に表はすことができるやうに思はれます。またまばゆくも、感覺には違ひありませんが、日が照りつけてゐることと十分なことでありませう。むしろ海面から射してゐることを強調した方が、効果もあるでせう。

う。

海手より日は照りつけて山櫻

燕村

燕村は、そのまゝの感動をたくまずにこのやうな句にしたのであります。感情を端的に句に盛つたよい例でありませう。

(5) 瀬戸内海は、海の樂園といはれてゐます。船は、この海面を靜かに走つてゐます。數かぎりもない島山が、廻り燈籠のやうに隠見してゐます。船中からこの景色をあかずに眺めてゐるうちに、これらの島山が、後へ〜とつき従つてくるやうに感じられました。夏の甲板上の爽快さは限りなく、颯爽とした氣持になりきつてゐます。

船ゆけり夏の島山を率てゆけり

誓子

現代俳句の先驅者として最高峯をかち得た山口誓子が、近代的の感覺と表現を大膽に扱つた句であります。「率てゆけり」を、「遠のけり」「遠のきき」といひ

かへてみると、いかにも感動が弱くなります。島山の言葉も捨てがたいものです。表現技術の重要なことを示すに十分であります。

(6) 今まで挙げた例は、大體情景から湧いてきた感動から、句になるまでの過程を説明したのですが、なほ、動物、植物を取材にして、しかも、いろいろな角度から、または観點から句にした實例を挙げてみませう。

(イ) 沈丁花(丁字、沈丁)

沈丁花は、蕾の外がはは紫赤色で、咲くと内面は白く、極めて香氣の高い春の植物であります。春季に路次などを歩いてゐますと、どこからともなくしのびよるやうに香つてきて、春愁を驅りたてるものであります。

日おもてに咲いてよこれぬ沈丁花
素十
沈丁の咲きはじめたる白さかな
立子
門ふかく沈丁の香に這入りけり
たけし

一本の沈丁の香の館かな 虚子

前二句は沈丁花の花そのものを、第三句は、沈丁のにほふなかの自分の動作を、第四句は、沈丁のにほふやしきを、それごとくうたつてゐます。かやうに一つの素材(季語)からも、種々の角度から描寫できるのでありますから、作者としても種々の面から句作する練習が必要であります。

(ロ) 蝌蚪(お玉杓子、蛙の子)

蝌蚪一つ落花を押しして泳ぐあり 泊月
蝌蚪一つ鼻杭にあて休みをり 立子
尾を振つて流され行くや蝌蚪一つ 同
風吹いてうちかたまりぬ蛙の子 鬼城
天日のうつりて暗し蝌蚪の水 虚子

第一句から第三句までは、蝌蚪そのものの動作を描き、第四句は蛙の子の吹

きつけられてる状態を、第五句は蝌蚪のある水をそれ／＼描寫してあります。このやうに、いろ／＼な角度から眺めて、新しい發見に努めねばならぬことは、前の沈丁の場合と同じであります。こゝでは蝌蚪、蛙の子、蝌蚪の水といろ／＼な言ひ方がありますから、その時の情景を的確に表現することのできる言葉をえらぶことに心がけねばなりません。言葉をかへていふと、季語の應用とでも申すことができます。

なほ例を挙げれば、際限がありませんし、紙數にも限りがありますので、この程度にとどめておきます。

(四) 切字きれじについて

俳句は十七音詩といふ最短詩形であるために、象徴とか、暗示の力に頼らねば、なか／＼十分の効果が挙げられません。それ故に古來から切字といつて、切斷的な表現を用ゐて、意味の省略をはかつたり、省略によつて暗示性をもた

したり、あるひはまた、感情の焦點を表示する方法として行はれてをります。殊にその代表的なものは「や」かな「けり」などでありましたので、俳句は「やかな文學」とまでいはれたほどですが、この呼稱は、あまりこの切字が濫用されて、何でも「や」かなを附けて作つたりしたので、俳句と言へば、何々やとか何々かなでなくてはならぬやうに思はれ、輕蔑さへまじへた言葉であるのであります。しかし、これは、何も「や」かなそのものの罪ではなくて、無自覺に使つた人の罪であります。「や」かなの切字としての價値も決して輕視してはならないのであります。むしろ常に表現の流動性に心がけて、内容に最もふさはしい表現をえらび「や」かなの生命を生かすべきところは、十分に生かすことが必要です。切字の代表的のものについて、簡単に説明しませう。

(1) やの用法

(イ) 詠嘆

閑さや岩にしみ入る蟬の聲
住みつかぬ旅のこゝろや置火燧

芭蕉 同

(ロ) 提示(物を指して云ふ辭)

この道や行く人なしに秋の暮
髪剃や一夜にさびて五月雨

芭蕉 凡兆

この提示の場合は詠嘆とちがひますから、句切れは「この道や行く人なしに、秋の暮」髪剃や一夜にさびて、五月雨」であります。

(ハ) 願望(願ふ辭)

「や」は多く「ばや」と熟します。

青葉して御目の雫ぬぐはばや

芭蕉

(ニ) 疑問(疑ふ辭)

亡き人の小袖も今や土用干

芭蕉

枯れ果てゝ霜に恥ぢずや女郎花

杉風

(ホ) 竝列(物を數ふる辭)

水汲みの後や先やの螢かな

乙州

(ヘ) 反語

薬ぬすむ女やはある朧月

蕪村

思ひきや晝賛の梅を冬の宿

北枝

(ト) 命令

秋涼し手毎にむけや瓜茄子

芭蕉

これらのなかでも一番多く用ひられるのは詠嘆の場合であります。

(2) 「かな」の用法

「かな」は、元來詠嘆の「か」と「な」とが熟した語といはれるもので、したがつて「かな」は、まづ詠嘆のみに使用されるものだといふことができませ

う。

のぼり帆の淡路はなれぬ汐干かな
呼びかへす鮎賣見えぬ霞かな

去 來
凡 兆

(3) 「けり」の用法

時の助動詞の一つで、過ぎ去つたことを詠嘆的にいふ場合に用ゐられます。特に詠嘆の氣持が強く出た場合は、過去の意味を失ふこともあります。

時の觀念の表はれてゐるものに

鶯の巢のかくても経けり春の月

去 來
蓼 太

純然たる詠嘆としては

湖の水まさりけり五月雨

去 來

があります。

以上の外になほ切字として「かも」「は」「に」「を」「と」「も」「つゝ」等々挙げれ

ば多数ありますが、こゝでは省略します。

(五) 句作の方法

一般に句作する方法としては、寫生の方法が最上です。畫家が寫生するやうに、題材を廣く自然と生活のなかから拾ふのであります。初めはちよつと取りつゝのに當惑しますが、なれるにしたがつて要領を得るやうになります。視覚聽覺その他全感能を働かすことの必要さは、當然のことです。このほかに一般に行はれてゐる方法としてつぎの三つを擧げることができませう。

(1) 題詠

(2) 句會兼席題

(3) 吟行

(1) 題詠

俳句雜誌、新聞紙上の俳句欄に、多く行はれてゐるもので、一定の〆切日ま

で、課題、例へば「行春」「螢」といふものについて、一定の句数だけ制作する方法であります。この方法による場合は、多くは過去の體驗から、聯想により想念を呼び起して作るのがありますから、やゝもすると机上俳句に終る恐れがあります。できれば課題句についても、寫生の態度によつて、新たな發見、新たな感情によつて作ることが好ましいのであります。

(2) 句會

一つの俳句雑誌を發行する結社が、その讀者のために、あるひは同好者だけの俳句の修練のために、また最近では、工場における産業報國會の一つの仕事としてもよほされてゐます。

この句會の形式は、開催の時日、兼題、例へば「雲雀」「花祭」通し何句といふことをあらかじめ發表しておき、句會當日までに、兼題句を提出させます。

當日は、席上で、席題「董」何句といふことを發表して、べ切時間内で句作す

ることになります。大體この句作時間は一時間前後に三句位作りあげるやうになつてゐますから、相當の努力を要します。この句會にあつては、何といつても、過去の體驗を基本として、想像を生かす以外にはありません。兼題については、題詠と同様に課題句で、しかも一定時日の餘裕もありますから、前に述べたと同様のことがいはれませう。しかし席題は机上句となりがちなのもやむを得ません。

このやうに、とにかくべ切時間になりますと、幹事が清記しまして、選句すべき句数を定めますから、清記された句稿が、順次まはされてきましたら、先づ豫選選句を選び、最後に規定の選句数にして、幹事に提出します。幹事は、選句をとりまとめ、披講に移ります。披講は幹事が、各人の選句を朗々と讀み上げてゆきますから、その折、自分の句がありましたら、自分の名を名のるわけです。採點係は、この間それらの作者ごとに得點を與へ、最後に得

點表を發表することになつてゐます。披講後は、今日の作品評とか、感想を發表したり、論議も行はれます。

句會の楽しみと、有益なことは、實にこの時間ではないかと思ひます。指導者のある場合には、最後に、感想を述べるのがまことによろしいと思ひます。句會は、そのほかに、作者に刺戟を與へ、句作熱を盛んにすることになります。

(3) 吟行

吟行は大正末期から昭和にかけて、特に盛んになつたやうであります。根本的な理由は、寫生の緊要なことから發したことで、もちろん自然のなかに遊び同時に句作することは最も健康的な方法といつてよろしいでせう。これは、句會と同様に豫定の時日と、目的地を發表して、多人數で出かけます。今まで路傍石のやうに見捨てられて、省みられなかつたいろ／＼なものが新たに發見

され、感觸されて、歡喜を上げるのも、俳句の道にはいつたお蔭とでもいへませうか。べ切時間になりますと、そば屋とか茶亭などの一室を借りて、清記、選句、披講といふ句會と同様の形で行ふのであります。この吟行について特にいひたいのは、自然のなかから、どのやうに他の人が寫生してゐるか、同じものもいろ／＼な角度から句作されてゐるに違ひありませんから、選句、披講の場合にも、十分氣をつけてをりますと、自分の作句に引きくらべることもできますして、非常に有益なものとなります。

最後に、句會にしても、吟行にしても、選句といふことをしなければなりません、これがまたなか／＼むづかしいものであります。高濱虚子も「選句は創作である」といふやうなことまでいつてをるほどですから、十分に心を入れて選をしなければなりません。したがつて他人の選句についても注意して、他山の石として、自己の鑑賞眼を養ふやう努めてほしいのであります。

第二章 俳句と人生

— 戦争俳句について —

俳句は、從來とかく有閑的、遊戯的文學のやうに考へられてゐました。しかしこれは俳句ばかりでなく、趣味といふものは、大體において餘裕の時間、餘裕の生活、餘裕の氣分においてのみ樂しまれ、そしてたしなまれるものであるかのやうに考へられてゐることを想像すれば、もつともなことだと思ひます。しかしながら事實は、これでは決して理想のものではないのであります。

一般藝術についてもいへるのでありますが、この藝術精神は、決してわれわれの生活から游離したり、またその延長であるのではなくて、むしろこの藝術

精神を根幹として、われわれの生活は、打ちたてられねばならないのではないかと思ふのであります。この藝術精神の上に打ちたてられた生活こそは、種々の態様はありませうが、情懷のある、含蓄に富んだ、意義の深い、眞の生きがひのある生活となるものだといふことができるのであります。これは、藝術精神といふものは、結局は、純一であるからでありませう。この純一性こそは、すべてのものに通ずる根本的な要素であります、われわれ俳句の道にはいつた者も、この純一性を俳句の上にも生活の上にも一貫して持つてゐなければならぬのです。そこにわれわれの生活からも、尊いものが生まれてくるのであります。したがつて、われわれの俳句も、生活即俳句であり、俳句即生活であるのであります。俳句と人生とは、決して別個の存在ではなくて、表裏一體のものといふことができるのであります。

かく考へてみますれば、當然俳句といふものは、家庭生活においても、工場

においても、會社においても、また平和の時であつても、戦時下にあつても、切りはなすことができないものであります。われ／＼は、われ／＼の國民詩として、縦横にうたふのであります。家庭の妻や子に取材した多くの作品もあります。工場のエンヂンを聞き、ハンマーをにぎり、クレーンを仰ぎ、熔鑛爐を眺める生活からも、幾多のすぐれた作品が、残されてゐます。要は俳句をして机上の遊戯に終らさずに、自己の生活から、自然に生なまれるものたらしめることが必要なのであります。

現在我が國は、未曾有の聖戰を決行しつゝあります。この一大戦争のために、もちろん、われ／＼の生活にも、激動を受けずにはをられません。しかし必勝の信念を以て、東亞共榮圈の確立のため、東亞民族の解放のために最後まで宿敵、米英をたゞき破らねばなりません。われ／＼はあらゆる困苦缺乏にも、につこりと笑つて耐へ、甘んずることさへもできねばなりません。傳統の

盡忠の精神はさることながら、この藝術精神の發露も見逃すことのできない事實であります。少しく戦争俳句について述べてみたいと思ひます。

戦争俳句を歴史的に眺めてみますと、詩歌のそれとはちがつて、古くはほとんど、これに相當するものは見られないのであります。眞の戦争俳句らしいものは、ごく最近であつて、支那事變以後といつてもよろしいのであります。

戦ひのあと少き燕哉 子規

なき人のむくろを隠せ春の草 同

梨咲くやいくさのあとの崩れ家 同

古城やいくさのあとの朧月 同

行く春の酒をたまはる陣屋哉 同

これらは、日露戦争の折、正岡子規が従軍し金州で作つた句であります。ほとんど戦蹟俳句とも見られるやうな、戦争の只中にあるなま／＼しい息吹は

少しも汲みとることもできません。近くは、山口誓子が満洲に遊んだ時、日露戦争をしのんで作った句があります。

枯野焦げ車輪を上を列車倒れ

誓子

かなり實感の出ている句ではありますが、身を以て戦火をくぐつたなま／＼しさはまだ薄いやうであります。たゞ一般的にはあまり知られてをりませんが、上海事變をうたつたのに當時の機關銃隊長の小田原潮少佐の句があります。

春泥に十九路軍の旗を踏む

麥伸びて便衣のかばね隠れけり

蝌蚪生れていくさは遠くなりけり

これは前掲の諸句に比すれば、生き／＼しさは、感じられるのではないかと思ひます。然るに支那事變以後に至つては、さすがに舉國の大戦争であり、未曾有の聖戦であるといふことのためでせうか、また俳人としても應召し、みづ

から戦火にさらされた故もあるものでありませうか、りつばな俳句が、多数生まれてゐるのであります。いまこれを銃後のものと、前線のものに區別して佳句をそれ／＼擧げてみませう。たゞこゝで一言したいのは、銃後にあつて、前線をしのび、映畫とか、寫真とか、記事とかによつて俳句を作る場合があります。この事の是非の論は、相當やかましくいはれたのでありますが、結局、この問題は作者の態度に歸する問題でありまして、決定的に、是非を決するわけにはゆきません。といふのは、作者が戦火のなかにみづから體驗することなく、想像によつて俳句を作ることに、果して意義があるものであるか。これは決して人のためではない。自分の生活と一體何の關聯があるといふのか。作者の作句的良心が、それを否定すれば、非であり、容認すれば、是となるといふことになりませう。

とにかく俳句をして、生活から生まれしむべきものとするならば、まづ想像

なり、虚構の、ことに聖なるいくさの俳句を作るのはさけないものでありませう。したがってこゝでは、これらの系列に属するものは、省略することにしませす。

(1) 前線俳句

長谷川素逝

みいくさは酷寒の野をおほひ征く
わが馬を埋むと兵ら枯野掘る
ねむれねば真夜の焚火をとりかこむ
霜おきぬかさなり伏せる壕の屍に
枯草に友の流せし血しほこれ
寒夜くらし曉けのいくさの時を待つ

米田虚舟

銃にぎり寝ねし腕に霜か照る
クリークに浮びゆくもの夜は凍る
ペーチカは火を絶ち無惨なる臥床
戦友を失ひ寒夜塹壕に居る

津久井 玖磨男

萩原 直

(2) 銃後俳句

陸軍病院

横山白虹

傷兵の頬傷よぎる荆棘枯れ
廊さむしからの擔架を眼もて趁ふ
寒燈下手術にゆきし兵の床

片山桃史

應召の兵とその妻水噛む

水原秋櫻子

ますらをの父か夏足袋の眞白なる

前田普羅

兵送る少しの酔ひに霧ふかし

なほ、大東亞戦争を詠じたもの二三の例を擧げてみませう。

前田普羅

かざりなき捷報しづか爐に燃ゆる

霰うち木の葉吹きまき年いそぐ

富安風生

國起ちし日の一枚を剝ぐ古曆

長谷川素逝

おほみことこのとき冬日もとどまれる

あふぎたる冬日滂沱とわれ赤子

最後に蛇足を加へるならば、今日の大戦時下におよそ、俳句の如きものは無用のもののやうであります。いかなる困苦缺乏にも堪へ、また倒れることがあつても平然として再起するこの不敵の魂は、實に俳句の精神からも生まれしめることができるのであります。どうか、國民詩として古くから傳承された俳句をして、今こそ昂揚せしめ、御國のために、御奉公をつくすやう、衷心から望んで已みません。

短歌入門

第一章 昔の短歌

野菜を作るにしても、その野菜の性質を知らなければよい結果を得られないやうに、短歌に志す者もまた短歌の本質といふものを知らなければならぬ譯であります。およそこの道の初學者に對して、はじめからその本質を云々することは、かへつて混迷を與へる惧れがありますので、こゝでは簡單に、一般的概念として「短歌とはいかなるものか」といふことだけの説明にとゞめておかうと思ひます。

昔の短歌

俗に「和歌」とよばれ「和歌三十一文字」と言ひ馴らされてゐる「短歌」に對して、強ひて一言にして定義づけるならば、すなはち「短歌とは、五七五、

七七の五句三十一音の微妙な韻律をもつた言葉のつらなりから成る詩である」といふことができませう。

八雲立つ 出雲八重垣 妻ごみに 八重垣つくる その八重垣を

右の短歌は、神代の昔、素戔鳴尊が、出雲降りいづみくだの時に詠まれた有名なお歌で、「出雲の須賀宮すがのみやに御妃を迎へられた尊がお國の周圍に瑞垣みづがきを繞らして御睦おんむつましくおすまゐなさるお歡びの情」を詠まれたものであります。今日まで、いはゆる五七五、七七調短歌の最初のもつとせられ、古今集の序文にも、國くにつ歌うたの最初の作だと述べてゐるところのものであつて、はからずもこゝで、短歌の起源の一端に觸れたわけでありますが、この事實によつて、短歌といふものはすでに我が國の神代の昔からあつたといふことが理解できようかと思ひます。

しかもこの短かい短歌の形式は、日本人の率直にして素朴純眞な感情を歌ひあげるに適した、わが國獨特の詩型であつて、まことに「國歌」とよぶにふさ

はしく、これを舌端にのぼせて反復唱詠する時、その歌意のわかると否とにかかはらず、さらにまたおのづから胸に沁み徹るものがあるであります。前述のやうに、この短歌の形式はわが國民性とよく合致して、その後、奈良朝時代に於ける隆盛は、作者五百六十餘人、短歌四千七百七十三首に及ぶ「萬葉集」の集大成となり、さらに後世「古今集」「新古今集」などを含む二十一勅撰集時代を経て、明治時代のいはゆる新派和歌運動となり、さらに今日の大隆盛を現出したといふのが、縦に見た短歌の簡単な歴史であります。便宜上こゝで、萬葉集以下、古今、新古今二歌集のなかから若干の作品を抄出して、その歌風の特色相違について簡単に述べておきませう。

(一) 萬葉集

さきにも述べたやうに「萬葉集」は奈良朝時代に集成された我が國最古の歌集で、収録された歌數もまた前記のやうに莫大なものであります。さらに本

歌集には、上は 天皇より下は一介の農夫や無名の「讀人知らず」に至るまで
收められてゐます。しかも、その時代を遠くへだたる一千數百年の今日、なほ
「短歌の聖典」として渴仰賞讃されてゐることは、その珠玉の作品價値を立證
するに餘りありといふことができませう。

夕されば小倉の山に鳴く鹿の今宵は鳴かず寝ねにけらしも

舒明天皇

わたつみの豊旗雲にいり日さし今宵の月夜清く明りこそ

天武天皇

石激る垂水のうへのさわらびの萌え出づる春になりけるかも

志貴皇子

あしびきの山の雫に妹待つとわれ立ち濡れぬ山のしづくに

大津皇子

わが背子をやまとへやると小夜ふけて曉露に吾が立ち濡れし

大伯皇女

うらさぶる心さまねしひさかたの天のしぐれの流らふ見れば

長田王

流ふる雪吹く風の寒き夜に吾が背の君はひとりか寝らむ

興謝女王

小竹の葉はみ山もさやに亂れども吾れは妹おもふ別れ來ぬれば

ぬば玉の夜さりくれば卷向の川音高しも嵐かも疾き

柿本人麿

今日よりは顧みなくておほきみの醜の御楯と出で立つわれは

今奉部與曾布

おほきみの詔かしこみ磯に觸り海原わたる父母をおきて

なつそひく海上瀾の沖つ渚に船はとどめむさ夜ふけにけり

大部藏人磨

読人知らず

葛飾の眞間の浦曲を漕ぐ船の舟人さわぐ浪立つらしも

同

多摩川に晒す手づくりさらさら何ぞこの兒のここだ愛しき

同

以上、御製を始めとして、読人知らずの作品までを参考までに抜いてみました。初心者は古語に依る難解が多いために、あるひは當惑するかも知れませんが、この「萬葉集」の特長とする歌風は、まづ「眞實を端的に直截に三十一音に歌ひ上げる」といふことができます。眞實を表現する事を外にしては決して秀れた藝術は成りたちませんが、この點次に述べる「古今集」や「新古今集」

の歌風とは大いにその趣を異にしてゐます。要するに、「萬葉集」はまことの文學といふことができませう。

(二) 古今集

延喜年間、醍醐天皇の宣下を仰いで成立した「古今集」は、収録するところの短歌一千百首ほどに及んでゐます。紀貫之ほか三撰者の手に成つたもので、その歌風は、かの「萬葉集」が、實感を生命とし、眼に映り、心に觸れたことを率直に素朴に表現してゐるに對して、「物のあはれ」といふものを強調し、理智の眼を以て物を見、その表現に際しては殊さら雅趣をこらすことに重點をおいてゐます。その歌の調べにおいても、「萬葉集」の力強く調子の張つてゐるのに對して、線が弱く、また内容の空虚さは到底われ／＼の胸奥に迫るものがありません。ただ、短歌の歴史の上から見るとは、やはり重要な位置を占めてゐるわけで、またその歌風を通じて、同時代の世相などに思ひ及ぶ時、大いに興

味をそゝるものがあります。

左にその歌風を見るために若干の歌を抄出してみませう。

久方ひさかたの光りのどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ

紀友則

霞立つ春の山べは遠けれど吹きくる風は花の香ぞする

藤原興風

花の散ることや侘しき春がすみ立田の山の鶯のこゑ

藤原俊蔭

花の色は移りにけりな徒いたづらにわが身世にふるながめせし間に

小野小町

なきわたる雁の涙やおちつらむ物思ふ宿の萩のうへの露

読人知らず

一見いはゆる理につんでゐるやうに見えながら、再讀三讀するにつれて、機智や言葉のからくりがめだちます。實感の稀薄さが一首をしめてゐることに留意しなければなりません。和歌はあくまでも眞實の詠出を生命とする萬葉の精神を精神となすべきで、初學の人は特にかういふ點に注意しなければなりません。

(三) 新古今集

「新古今集」二十卷、一千九百餘首は、後鳥羽上皇の仰せに依り、元久二年に成つたもので、その歌風は、いはゆる世に「新古今風」といはれる通り、非常に幽玄な優美體の調で、一面、古今風の延長とも見られてゐますが、一口にいへば、一象徴味を匂はせた唯美主義」ともいふことができませう。一首を構成するにあたつて極力技巧をこらし、佳調をたふとび、内容の充實よりもむしろ外型の美に裝飾を加へた點は、「古今集」によく似てゐますが、全體の歌調に餘韻と餘情を求めた詠風は、一つの大きな特色であります。眞實の流露といふこと

よりも、機智と才藻とを重要視した點、やはり「萬葉」の歌風と相反するものがあります。

袖ひぢて掬すくびし水の氷れるを春立つ今日の風やとくらむ

人はいさ心も知らずふるさは花ぞ昔の香に匂ひぬる

貫之

君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る

友則

久方の月の桂かつらも秋はなほ紅葉すればや照りまさるらむ

年を経て花の鏡となる水は散りかかるをば曇るといふらむ

伊勢

以上で、萬葉、古今、新古今三集の歌風の概略を紹介しましたが、これからすぐに現代の歌壇について述べませう。

第二章 現代の歌壇

短歌を作る人が集まつて、その作品を発表したり、作品について批評論議したり、交渉をもつたりするなど、そこに一つの組織ができてきます。これを歌壇といつてゐます。明治初年は、すべての文物、制度の交替期で、新しい文化がめばえたのは、日清戦争頃からの事でした。この頃、久しく衰へてゐた短歌に、新しい主義主張を持つて新風を樹立することに努力したのは、落合直文とそれをめぐる人々であります。この派の人々の歌を新派と呼んで、それ以前の歌風を守つてゐる人々を舊派といひ、この新派發生後の短歌の世界を、一般に現代歌壇といつてゐます。

また、正岡子規は「短歌寫生論」を唱へて「古今集」以來の短歌の、内容を無視した外型の粉飾に論難を加へ、自分の作品の上にも盛んに寫生的表現を試みました。試みに子規の作品をかゝけて、當時の新派和歌がどういふものであつたかを見てみませう。

いちはつの花咲きいでて我が眼には今年ばかりの春行かむとす

世の中はつねなきものとわがめづる山吹の花散りにけるかも

若松の芽だちの緑長き日を夕かたまけて熱いでにけり

新派和歌とはいひながら、傍線を引いたあたりには、なほ「新古今的」な情趣も残つてゐますが、いはゆる「寫生」された情景を通して、今までの歌に見られなかつた新しい抒情味に接することができます。ちなみに、子規の「寫生」といふは、事物の在りのまゝのすがたを、短歌三十一音に寫し取る事であつて、それは、かの「萬葉」歌風の、眞實を直敘するものと同じ意味になるわけ

であります。後年、齋藤茂吉は、子規の「寫生」よりさらに一步鋭く踏みこんで、「實相觀入論」といふのを打ちたてました。すなはち、單に事物の在りのまゝを寫し取るだけにとゞまらず、その事物對象に鋭く深く觀照の眼をこらしめて、その生命をもつかみ取らねばならぬ、といふのであります。

つぎに、子規以後現在に至るまでの著名な歌人を、その作品とともに紹介しませう。

石川啄木

東海の小島の磯の白砂にわれ泣きぬれて蟹とたはむる

たはむれに母を背負ふてそのあまり輕きに泣きて三步あゆまず

はたらけどはたらけど猶わが生活樂にならざりちつと手を見る

石をもて追はるる如くふるさとを出でし悲しみ消ゆる時なし

呼吸すれば胸の中にて鳴る音あり風よりも寂しきその音

啄木の歌の魅力は、何よりもまづ、だれにも分かりやすいといふことにあります。日常生活を大膽に歌ひあげた點は、革新期にあつた當時の歌壇としては特に驚異でありました。ただ啄木の歌の讀者が非常に多いにもかゝらず、現歌壇にたいするその影響の極めて少ない事から考へますと、現代短歌の風潮がどういふ點にあるかといふことがほゞわかりませう。

與謝野晶子

木蓮の散りて干潟の貝めける林のみちの夕月夜かな

金蓮花そよ風吹けば砂山の紅蟹のごと逃げまどふかな

薄の穂つひに野澤の水よりも白くめでたくひろごりにけれ

こほろぎが清く涼しく鳴きいでぬ雲の中なる奥山にして

昨日の榮華の屑の身なりとも思ひなさまし寂しさに過ぐ

晶子は、落合直文の門から出た與謝野鐵幹の指導のもとに、名實ともに新派

樹立の實を擧げ、今日の歌壇の隆盛の基礎を作りましたが、その作品はやはり言葉の華かさに重點を置き、實感を輕んじた點もすくなくありません。啄木の歌が分かりやすいといふ點で多く年少者に親しまれたやうに、晶子の歌は、その甘美な味ひが多くの子女の心を惹きつけたのであります。

長塚節

白埴の瓶こそよけれ霧ながら朝はつめたき水吸みにけり

梧桐の夏をすがしみをりをりは壘の上に寝まく欲りすも

たらちねの母が釣りたる青蚊帳をすがしといねつたるみたれども

よしといへば水には足はひたせどもいたづらにして小夜ふけにけり

單衣きて心ほがらになりにけり夏は必ずわれ死なざらむ

「鍼の如く」と題する六十四首の、有名な大作の中から五首を抜いて見ました。節は、喉頭結核をわづらつて、その秀れた天分を惜しまれつゝ若死しましたが、

永年の間、不治の病魔と闘ひながらも、研ぎ澄ました鍼はりのやうにつめたい神経を以て、右の様な異色のある作品を作りました。

若山 牧水

白鳥はかなしからずや空の青海の青にも染そまずただよふ

幾山河いくやまかは越えさりゆかば寂しさのはてなむ國ぞけふも旅ゆく

白玉の齒にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲むべかりけり

青紫蘇あせじそのいまださかりをいつしかに冷やし豆腐に我が飽きにけり

潮干潟しほがたささらく波の遠ければ鶴おほどかにまひ遊ぶなり

牧水は「漂泊の歌人」といはれてゐます。旅を好み、またよく酒をたしなみました。その歌のしらべはあくまでなめらかに、朗々と張りあげて誦詠するに適してゐます。

木下 利玄

牡丹花は咲き定まりて静かなり花の占めたる位置のたしかさ

花びらの匂ひ映りあひくれなゐの牡丹の奥のかがよひの濃さ

花になり紅澄める鉢の牡丹しんとしてをり時ゆくままに

花びらをひろげて大き牡丹花に降り出の雨のぢかにぞあたる

牡丹花の大きな花びら夢はなれ低木ひくきの下もとの地に移りたる

有名な牡丹の歌であります。一本の牡丹の花をいろいろな角度からつぶさに見て、寫生の域をはるかに越え、象徴的な匂ひの高いものとしてゐる點、まことに非凡といふことができませう。

島木 赤彦

土剥げて岩あらはるる芝山の立ちのふくらみに風吹く音す

雪はれし夜の町の上を流るるは山より下る霧にしあるらし

冬空の日の脚いたくかたよりてわが草家の窓にとどかず

みづうみの氷は解けてなほ寒し三日月の影波にうつらふ
 山道に日は暮れゆきて梅の葉に音する雲は過ぎ行きにけり
 赤彦は、子規の「短歌寫生論」から深く踏み入つてつひに堂々たる一家を成した歌人であります。その作品の上に、一貫した寂寥感をたへてゐるのは、作者が、長野縣の一寒村に生まれたといふことよりも、その性格の故でありませう。性格は「個性」を生む母體でありますから、歌人にとつては實に重大なものであります。

中村 憲吉

鋪道の家壁のかげの青き靄夜くだちながら人の居るこゑ
 青き靄ながれて夜はふくれども鋪道の上はまだ乾きをり
 槻わか葉さやさや映る煉瓦みち行きつつわれの素肌さみしも
 眞日透きてわか葉かさなる深みどり匂ひしたしもわが衝く息に

若葉深くわが入り來れば製薬の匂ひしたりぬわが眞近くに
 これらの作品を一讀するものは、まづ、その感覺の新鮮さに氣がつくでせう。この「新しい感覺」は、新しい作品を生む肝腎な一要素であつて、ゆるがせにできないものであります。

古泉 千樫

あからひく朝靄はるる土手の上に雉子光りて見えにけるかも
 さ青なる露の丸葉に尾を觸りて雉子しまらくうごかざりけり
 おり立ちてこの大ぜいのよろしもよ原の大田を今日植うるかも
 ねもごろに二足三足ふみ入りて浮き早苗さす妹がすがたや
 おもてにて遊ぶ子供の聲きけば夕かたかけて涼しかるらし
 右の第一首と第二首には、同じく感覺の鋭さが見えます。しかしこの歌人の本質的なものは、歌調のおほらかに澄み切つた點にあるやうに思はれます。

以上八氏はすでに物故された歌人ではありますが、つぎに、現歌壇になほ活躍してをられる二三の大家について述べませう。

北原白秋

手にとれば桐の反射の薄青き新聞紙こそ泣かまほしけれ

指さきのあるかなきかの青き傷それにも夏は染みて光りぬ

新しき野菜畑のほととぎす背廣着て啼け雨の霽れ間を

詩に、民謡に、童謡に、行くとして可ならざるなき不出世の大詩人として、

明治、大正、昭和の三代にわたつて活躍をつゞけてゐる白秋は、その短歌においてもまたはやくから一方の雄として輝いてゐました。初期の作品は、右のやうな新鮮な感覺的なものから出發しましたが、よはひ齡をかさね、境涯境涯の深まるにしたがつて、その歌風にもおのづから變遷があり、こゝ數年來は眼の病氣とたゝかひ乍ら、薄明のうちになほあくなき精進をつゞけてゐます。しかも、白秋の

やうな天分を以てしてさへ「この道容易に至りがたし」といつてゐるその謙虚さに思ひをいたさなければなりません。

照る月の冷さひえだかなるあかり戸に眼は凝らしつつ盲くらひてゆくなり

暖房は後冷あとひえきびし夜にさへや眼帯白くあてて寝むとす

鳥籠に黒き蔽布をかけしめて灯は消しにけり今は寝ななむ

蘭の香や冬は日向ひなたに面寄せてただにひとつの命養ふ

春蘭のかをる葉叢はぢらに指入さゆびれ象かたちある花にひた觸れむとす

すなはち、白秋の病中吟であります。一音一句をもゆるがせにしない格調のきびしさと相まつて、悲痛な作者の心がひしひしと心を打つてくるのをおぼえます。

齋藤茂吉

ひさかたのしぐれふりくる空さびし土に下りたちて鴉は啼くも

死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞ゆる

しまし我は目をつむりなむ眞日おちて鴉ねむりにゆくこゑきこゆ

白秋と同じやうに、明治、大正、昭和の三代にわたつて名聲を輝かしつゞけてゐる茂吉の非凡さは、これらの作品からもたゞちにわかります。まことに特異性に富んだものであります。特異な感覚といふよりは、むしろ、特異な神経といつた方が適切なほどあやしく心にせまるものがあります。右の三首はやはり茂吉の初期の作品であります。近作の傾向はだいたいつぎのやうなものであります。

むらぎもの心清けくなるころの老に入りつつもの食はむとす

一月の二日になれば脱却の安けさにゐて街を歩けり

むらぎもの心にひそむ悲しみを發きながらに遊ぶといふや

窓の戸の白々あけに處々の肉いたみながらに熱おちにけり

みづからは風邪のなごりのたゆくして羊齒むらのへに一日を惜しむ

初期の歌に見られた特異性は、これらの作品にも見られますが、一面、茂吉の歌の魅力は「むらぎもの」以下三首のやうに、讀後何かしら割り切れないもの、残る點にありともいはれてゐます。別の言葉でいひますと、茂吉の複雑な心理状態に魅力があるといふことにもなりますが、直截を貴ぶ短歌のやうなみづかい型式の文學にあつては、その點一方に異論もあるやうであります。

釋 迢 空

山晴れて寒さするどくなりけり膝をたたけば身にしみにけり

いきどほる心すべなし手にすゑて蟹のはさみをもぎはなちたり

人も馬も道ゆきつかれ死ににけり旅寝かさなるほどのかそけさ

邑山の松の木むらに日はあたりひそけきかもよ旅びとの墓

穂すすきのみづく呆けてゐたりけり日ごろけはしく我が居りにけり

その深刻さは、時に苛烈とさへ思はれるほどで、逍空は、この歌風を以て終始一貫、現在の歌壇に動きのない位置をしめてゐます。藝術上における「個性」の重大さはこゝでも立證できるわけであります。

さて、以上、明治以降の著名歌人について簡単に紹介しましたが、つぎに、現歌壇の一動向を知るために、それらの流派において活躍してゐる新人の作品を抄録して参考の一助としませう。

佐藤佐太郎

火消壺に燠を収めて寝につけばあきらめに似て一日終らむ

聞ゆるはあからさまなるもろもろの晝の響の一つにてよし

白椿呆然と咲き冬の日の晝つかたにて光ゆたけし

木俣修

夕風ぎのひかり濁れる坂下にまだリベットのうつ音止まず

ソ聯の捕虜無慮數萬と言ふニュース三日四日つづき息をのましむ
ドラム罐に水をみたし了へじ兵隊の表情のなごみいふばかりなし

鐸木孝

青嵐吹きしくなかに眼をあきて何見凝めむ今のこころぞ

青笹に自虐の相ちらと見てひたひたとくだる暗き道なり

青きもの地にみなぎる季いよよ意識過剰を人は嘆かむ

吉野鉦二

この大きな年移る夜に鼠鳴きわれは涙す何故しらす

寂として底にきびしき湛へある朝なりしかば心さやぎつ

關を衝きてゆく艦隊のありにしを見しものはなし見しめたまはず

坪野哲久

八手葉に雀衝撃して飛ぶや路地の翳りのリリと寒けれ

みづからを感^{いた}みたのめりひびきなき曉ひとときのこの凍^{しも}明^あり
われとゐるこの嶮^けしさに何もなき手を握りしめ短く言へり

米川稔

戦は死ぬものにこそ然れども二十九機ぞあはれ五隻ぞあはれ
極りてすがしきはむしろ苛烈なる境にかあらしとどまりがたし
すぎにけるわかき齡を問ひつつもはだへに汗はやまず流らふ

宮 柁 二

きはまりし疲れの果^はは秋口の黄砂の下に相抱き眠る

ねむりをる體の上を夜のけもの穢^けれてとほれり通らしめつつ

申送りつぶさに傳へ城壁を下りをゆく兵が草分くる音

まさに各氏各様の個性と特色とをもつてゐます。以上で現歌壇の一つの動向
を示したわけでありますが、廣い歌壇のなかには、なほ特色ある説を主張し、

特色ある作品を書いてゐる歌人の多いことはいふまでもありません。

第三章 短歌の種類

(一) 敘景歌

短歌を大別すると「敘景歌」と「抒情歌」の二つになります。「敘景歌」といふのは簡単にいふと「山川草木」「花鳥風月」等、眼前の風物を詠じたもので、一例を示すとつぎのやうなものであります。

かへるて 楓のなほ青葉なす公園に躑躅つづふたもと紅葉しにけり

読んで字のやうに、この歌の意味はきはめて明白で、「楓の葉がまだ青々としてゐる公園に、二本のつつぢの葉はもう紅くなつた」といふのであります。初

心者の作品としては、まづこの程度からはいつてゆくのが普通でありませう。普通の人間の眼に、普通にうつゝた目前の景色を、そのまゝ三十一音に寫しとつてあるだけに、たれにもわかりやすいが、しかし、この歌からは特に歌としての美しさも、文學としての深さも認められません。一口に敘景歌といつても各人の天分や、教養の深淺、見方の相違、感覺の鋭鈍などによつて、佳作にもなり、駄作にもなるのは當然であります。精進努力のいかんによつては、それぞれ天分に應じた歌境にまで上達し得るものであります。「おれには歌をつくる天分がない」などと、最初から断念してしまふのは早計であつて、いやしくも短歌に關心をもつほどの者であるかぎり、心がけ次第でその人相應の力量が發揮し得られるはずであります。

ゆふばえ 夕映のみのり田へだてて寂かなりひよどりのなく低き松山

前の歌にくらべると、この歌はやゝ年功を積んでゐますが、これとてもまだ

月なみの程度を出ておません。その上に「夕映」「みのり」「田」「ひよどり」「松山」等々、いはゆる道具立てが多すぎて、一首の感銘がかへつて稀薄になつてゐます。

ついでに、こゝで「字餘り」について説明を加へて置ませう。すなはち「みのり田へだてて」は、普通七音であるべきところが八音になつてゐるために一音「字餘り」といふことになります。しかしその字餘りが必然的にさうなる場合は一向にさしつかへなく、時にはまた、左の歌のやうに數音の字餘りさへも許されてゐます。

更にわが苦に徹せむときほふ昨日今日なほしおろかなり涙はくだる

これらの「字餘り」と反對に「字足らず」といふこともまたみとめられてゐます。

するどく人をののしる一聲の今響きしがつづく聲なし

第一句「するどく」は、普通五音であるべきところ、一音足らずの四音になつてゐます。しかしこの歌の場合では、人をののしる一聲の鋭さと、その聲の後につづく聲のない、ひっそりとした静寂感を出す上に、その「字足らず」がかへつて効果のある役割をはたしてゐることに留意してください。たゞしこれらの「字餘り」や「字足らず」は、初學者のみだりに試むべき性質のものではありません。

さてふたゝび敍景歌の話ですが、その極致ともいふべき作品をあげてみませう。

ゆく水の眼にとどまらぬ青水沫鶴の尾は觸りにたりけり

北原白秋

ひとり短歌だけでなく、詩、俳句、繪畫、彫刻、音樂などすべての藝術は、その藝術に親しむことによつて、趣味の向上と品性の陶冶をはかるだけでなく、

その藝術を通じて神を視るにある——といはれてゐます。たゞ凡庸の天分ではたやすくそこまでゆけるものではありませんが、白秋の右の一首などは、まぎれもなく、「神品」と稱してもさしつかへありません。この歌のもつ高さや深さといふものは、簡単に説明できるものでなく、また初學者には難解かとも思はれますが、その奥に、白秋の人生觀や宇宙觀さへもこもつてゐるわけで、同じ敍景歌といつても、もはや單なる敍景ではありません。短歌に志す者は、また、日常の歌作を通じて目にふれる一木一草にも神を觀るべく、教養を深め、感性を高めることが肝要であります。

(二) 抒情歌

「抒情歌」は、簡単にいへば、喜怒哀樂やその他の感情を歌ひあげたものであります。すなはち、喜び、悲しみ、樂しさ、願望などの感情の種々相を短歌に

まとめたものが、「抒情歌」であります。われ／＼は「感情の動物」といはれるくらゐ、その日常生活において「喜怒哀樂」の情を味はつてゐます。同じ喜びにしても、年齢、境遇、思想などの相違によつて、その性質様相にも相違のあるものであります。要は、自分の心に感じた感情を歌ひあげることが抒情歌の性格であります。

勤勞人には勤勞人の喜びがあり、樂しみが、時にはまた、悲しみや苦しみのもとなふ場合もありませうが、それらの感情を歌にし得る時、その喜びや樂しきは二重となり、また苦しみや悲しみの救はれることもありませう。短歌の道にはいることが深ければ深いほど、感情は繊細に鋭くなり、哀樂等の感情にたいしても敏感になるはずであります。深みあり、鋭さあり、味はひに富んだ抒情歌は、そこから生まれてくるのであります。

おのづから心弾みて出でてゆく勤めの道に若葉かがよふ

これは、初夏の朝、いそくと勤めに出てゆく、健康明朗な勤勞人の感情を歌つたものであります。その喜び樂しみの情と、明るい若葉の光とがよく照應して、まづひとかどの抒情歌となつてゐます。

母が眼をしまし離れ来て目守りたりあな悲しもよ蠶のねむり

齋藤茂吉

これは、作者が臨終に近い母親のかたはらをしばしの間、離れて来て養蠶室に蠶のしづかな眠り具合を見守りながら悲しんでゐる歌であります。左の一首をふくむこの時の數首は、發表當時の歌壇から絶讃されたものであります。

のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳根の母は死に給ふなり

表面的には、悲しいといふやうな感情を現してゐないにせよ、作者の、内にたゝへた悲嘆がひしひしとせまつてくる歌で、やはりりつばな抒情歌といふことができます。

寂しさに堪へてあらめと水かけて紅き生薑の根をそろへけり

北原白秋

乏しくも今は足りつつ茶の花のほふ隣を樂しみにけり

同

「寂しさに堪へてゆかう」と自分の心にいひふくめながら、紅い生薑の根をそろへてゐるといふ第一首、物質に對する過大な望みを捨て、わづかに事足る生活に満足しながら、隣り家の茶の花に心を遊ばせてゐる第二首、ともにしみくとした心境を表現した抒情歌であります。

第四章 生活の歌

花鳥風月などの歌にたいして、日常生活を歌つたものが「生活歌」であります。勤人には勤人の生活があり、家庭婦人には家庭婦人の生活があるはずで、さういふ自己の生活を歌にしたのが「生活歌」であります。

日もすがらタイプ叩きて疲れたる眼をぞ遊ばす窓の青葉に

これはタイピストの生活歌であります。りつばな詩となつてゐます。

植ゑつぐや日に日に暑き日の照りの半夏はんげ近づきみな瘦せにけり

これは、じり／＼と照りつける暑い田圃に、過勞に瘦せながら田植ををしてゐる農夫の苦しさを内にたへた歌で、「短歌」は、一介の農夫の心からもりつ

ばに生まれ出る藝術なのであります。なほ、生活歌の種々相にふれたいのですが、こゝでは工場における機械の歌を紹介してこの項を終ることにしませう。

久保井信夫

朝焼や淡き光の照りそへば機械は今は音のさやけさ

ダイナモのたけ猛りとよもす夜のくだち心ど深く牙ゆるものあり

夜は更けて響き牙えとほる發電機事なかるべしリズムととのふ

ダイナモのとどろ響かふ室に觀て桔梗の花は莖のか細さ

火を噴きておのれ焦げ果つ變壓器トランスの負荷ふかの極みを吾は思はむ

工場員には、やはり工場員としての特殊な生活があるわけで、殊に職務に忠實な工員であれば「機械も生物」といはれる通り、自分の毎日手がけてゐる機械に對して愛情をもつはずで、この機械に對する愛情が、取りも直さず、歌となる心の美しさであり、歌となる動機なのであります。騒音に明け暮れる工場

の、一見殺風景とも無味乾燥とも見える雰圍氣のなかからも、右のやうなすぐれた歌の生まれることに、工場人は工場人としての誇りと喜びとを見出さねばなりません。

(附) 連作について

短歌は、その一首のなかに、大なり小なり一つのまとまつた氣持を詠みこむことを約束として、これを「一首の獨立性」とよんでゐます。しかし、複雑な心境や、大きな材料を取り上げて作歌する場合、それが直ちに一首の上に歌ひつくせるものではなく、こゝに「連作」の必要が生じてきます。

中村 憲吉

おぎろなき息をもらせり内の海八十島かげに水の光れば
光る海の珠拾ひつつ磯かげの山かた附きて行かす母かも

磯に行くひまだに母はあはれなり我が新妻を愛しみたまへり
おほけなく涙おちたり生ありてあり磯の珠も母と拾へば
はしけやし母と妻とが濱にむつび珠ひろふ間を岩がくり來ぬ
ひとり來てかなしき我や磯の波光り沫吹けばまして愛しき
たまさかに歡ぶわれと思へかも晝磯のうへに涙とどめざらむ

この一連の歌は「磯の光」と題する、憲吉の有名な大連作の一部であります。作者が新妻と父母とうちそろつて、海濱に行樂を共にした時の複雑微妙な感情を、美しくもまた香りの高い短歌の連作として抒情した珠玉の名篇で、讀者もまた、心のきよまる思ひのする清淨な作品群であります。

第五章 作歌隨感

多讀多作

作歌初學の要諦は、何といつても「多讀多作」にあります。第三者の作品をできるだけ多く讀んで、その學ぶべきところを攝取し、自分自身もできるかぎり多く作歌を試みることであります。「多讀多作」の經過をもたないで、その上達を望むことは、まづ至難といふべきでせう。

物の見方について

この道の初學者にとつて、「多讀」はやはり必要であり、事實また、ある時機の作者には、至極安易に作品のまとまる時代のあるものですが、「安易にまとめあげることが必ずしも短歌初學の要諦ではない」——といふことを前提として標記の問題にふれて置きませう。これは、ある繪かきの友達から聞いた話であります。洋畫の基礎技術を學ぶ石膏像の素描で、初心者ほど簡單にてつとりばやくまとめあげてしまふとのことであり、しかし、この場合の「早くまとめあげるといふことは、必ずしも素描の正確完全さを意味するわけではなく、むしろ、石膏像にたいする觀照（見方）把握（つかみ方）の淺さと、表現の粗雜さによるものであります。素人や初心者が迂濶に見た石膏像の顔かたちといふものは、ただ一面の白つぼさのみが眼だつて、肝腎かなめの急所をつかむことができにくいものであります。一方、寫生の技にたけた具眼者の鋭い眼力は、その白一色とも見える顔面の各部分から、複雑な光線の當り具合や、

豊富な量感や、微妙な陰翳などをこまかに把握する爲に、かへつて表現に苦しむといふわけでありませぬ。要するに、初心者にはさういふ複雑微妙なものがかめず、大雑把な外型だけをとりばやく描きあげて、「能事終れり」としてゐるわけで、この粗雑な物の見方といふものは、作歌上達の上においても一つの落とし穴であり、障害をなすものであります。

草木も生物

かりに、庭前の一木一草を作歌の対象とする場合、われわれはまづ、そのいかなる部分を歌ふべきか、といふ問題にゆきあたりますが、それらの色彩や、光線の當り具合など、外型的なものをつかむ前に、まづ、その一本一草をわれわれ人間と同じく、一個の生命ある存在として見、その生物にぢかにふれるだけの心がまへがなくてはなりません。むしろ、この心がまへは、單にそれらの

対象物を前にして歌を作る時にだけ必要なわけではなく、常住不斷に心掛くべき性質のものであります。一木一草とはいふものゝ、われわれ人間のやうにいろいろな我執にわざはひされることのないそれらの清浄な生命から、作歌を通じて大いに學ぶべき必要があります。さて、その庭前の一木一草にも、春夏秋冬の季節の移りや、朝夕晴曇等、時間の推移、天候の變化等によつて、それぞれその趣きに變化のともなふのは當然であります。私どもは、その微妙な趣きの變化を見のがさぬやう、心素直にして、しかも鋭い感覺の眼を養ふことに平常から努力したいものであります。

さういふ周到な心がまへをもつてむかふ時、ただ目には青一色とより見えぬ一木一草にも、またおのづから生命の躍動が見え、深い陰翳が見いだされます。したがつてわれわれは、それらのものから盡くすることのない詩情を享受することが出来るわけであります。たとゝ矚目の風物に對する場合、われわれのも

つとも恐るべきは「感覺の鈍磨」といふことであります。このにぶつた感覺を以てしては、いかに生彩に満ちた山川草木の生命でも空であり、無であつて、この恐るべき感覺の鈍磨をふせぐには、月なみな言葉ではありませんが、やはり現實生活上の我執を離れて大自然に接し、絶えず清淨な心境に詩神をひそませておかねばなりません。

ライカの眼

近代科學の生んだ高級カメラに「ライカ」と稱する逸品があります。そのレンズの有する驚くべき性能感覺は、被寫體の生命を把握するに、なほ千分の一秒の短露出で十分であります。この點、白日のもとで、その貧しい「眼」の鏡玉を最大限度の明かるさに開放し、その上長時間の露出を與へて、なほかつ完全な映像を得がたいわれわれの鈍感さとは比較すべくもありません。また、こ

の「ライカ」のやうな高級カメラのレンズの持つてゐる性能は、單に被寫體の形態を正確かつ神速に感覺するばかりでなく、その包藏する内容生命はもとより、さらにその、かげ、にほひ、ひびき、あや等々に至るまで完全にとらへて遺憾がないのであります。機械の眼に劣るわれわれ人間の眼がはづかしいではありませんか。

まづ敍景歌

一方において多作をすゝめておきながら、その一方において取材の選擇を望むことは、一見矛盾してゐるやうであります。こゝでは「各自の作歌技能の分に應じて取材を選擇すべきこと」を前提として述べてみませう。早い話が、初學者は抒情歌よりも、まづ敍景歌に向かつて一意専心すべきであつて、輕々しく抒情歌などに手を下すべきではありません。石膏像と四つに取り組んで寫生

の完璧を期することが洋畫家の基礎勉強であるやうに、短歌初學者の基礎工事は、まづ敘景歌に對する切瑳琢磨から出發することが妥當であり、また本道でもあります。瞞目の風物を正しく觀照し、正しく三十一音の上に表現し得るだけの技倆を獲得した後でないかぎり、抒情歌に手をくだすことは冒險の上もない仕儀といはねばなりません。ひとかどの作歌技能をもつた作者でさへ、そのものする抒情歌は往々にして感傷におぼれ、甘きに墮しがちなものであります。まして初學者の抒情歌に至つては、ほとんど鑑賞に堪へ得るものがないやうであります。

また人により、嚴寒や猛暑の候に、より多く歌興を刺戟される場合もありますが、それらの對象から受ける刺戟や感光の度合にも、各自の性格や、心象のいかんによつて相違があるのも否めません。性格の激しい歌人の作品に「青笹」「青萱」等、するどい感覺をあしらつたものをしばしば見受けませんが、これ

は要するにその作者の個性の現れに外なりません。結局、歌の材料は廣く豊富に、これを自己の周圍から求めるに越したことはありませんが、それもたゞ漫然と求めるだけでなく、常に感覺を研ぎ澄まして、これをつかみとるほどの積極さがほしいものであります。

推敲の要

自分の眼にうつり、心に感じたことを、そのまゝすぐに三十一音に書き現した場合、それが直ちに完全な歌になつてゐるかどうかは、はなはだ疑問であります。實際的な問題として、自分の見たことや感じたことを、完全に三十一音に言ひあらはすことは容易ではなく、こゝに「推敲」の要が生じてきます。

青鷺に白鷺まじりあはれなり氷は解けて水に薄きを

白秋のやうな天分をもつてしても、その一首の、そのまた一句に徹すべく、推敲に推敲を重ねるといふことでありますが、右に抄出した一首の完成には数年の日子を要したともいはれてゐます。すなはち、事もなく、すら／＼と出た上の句「青鷺に白鷺まじりあはれなり」につづく下の句の間然するところのない十四音をたづねあげるために数年を要したわけでありますが、いゝ加減なところで投げ出さぬこの態度は實に尊いものであります。

事實、一首の短歌を形成する五七五、七七の各相当句に、微塵寸毫の遺憾もなくあてはまるべき詞句は、嚴密にいふとただの一つしかないわけで、その制作に當り「たかが三十一文字の歌だ」ぐらゐに輕々しく考へてゐる向きがあれば、それこそ大變なまちがひであります。さうした人たちは、短歌そのものの深遠さを恐れる前に、まづ自分自身の態度をはぢなければなりません。

散文化の問題

日本の文法をわれにたづね來ぬかまはず歌へとわれは答へき

指折り數へてみると、これでも歌らしくはなつてゐます。しかしこれでは、その時の事實を單に歌らしく寫し取つたといふだけで、特に詩としての深さもなければ特殊性もありません。若干餘情めいたものが感じられないこともありませんが、それは三十一音といふ天來の詩型からくる餘韻が大いにあづかつてゐるわけで、作品そのものの餘情ではなく、實際は散文の一節に過ぎないものであります。顧みてつくづく思ふに、われ／＼の日常生活は、まことに散文的であり、あるひは雜文的であつて、おびたゞしくうるほひのないものともいへますが、われ／＼はこの散文的な日常からできるかぎり脱却する一方において、短歌の散文化を極力警戒せねばなりません。短歌は、あくまでも「詩としての

歌」であり、決して「散文の一節」であつてはならないのであります。

自由律短歌

● 死んだ母の枕もとの黄色い菊、母が昨日活けた菊であつた

廣い歌壇の一隅には、いはゆる「自由律短歌」と稱して右のやうなものを書いてゐる人たちがあります。これらの人々の説に依りますと、「在來短歌の三十一音といふ型式は窮屈で不自然である」といふにあるやうであります。その窮屈を窮屈と感ぜず、不自然を自然にするやうに切瑳琢磨するところに、三十一音定型短歌の妙と生命があるわけで、短歌はあくまでも、三千年來の傳統である三十一音の型式を踏むべきであります。この型式に殉ずるところに、歌人として生きる意義があり、光明があるといふこともできませう。

實感尊重

短歌は、あらゆる文學がさうであるやうに、實感の表現をもつとも重んじます。作りものや、綺麗事であつてはいけません。自分の心に實際感じた以上に誇張したり、うそをついたりして、よい歌に見せかけようとして無駄であります。美しいとも感じないのに美しい歌を作つたり、悲しくもないのに悲しさうな歌を作る、これみな作り物であつて、本物でもなければ生きた歌でもありません。作りものの歌には人の心を打つ力がありません。歌を作るならば、人の心を動かすやうな生きた歌を作りたいものであります。「まごころ」の表現を生命とした萬葉作品の不朽の價値をここでも思ふべきであります。

第六章 批評と添削

歌の初學者には、自分の作つた歌に對する自己批判の眼がなく、やゝもするとうぬぼれや、獨りよがりになりがちで、かへつて上達の障害となる場合が多いやうです。また他人の作品に對する正しい鑑賞眼をもつことも、作歌上達の上には缺くことのできない問題であります。以下「批評と添削」の實例についてすこし述べてみませう。

こんもりと青葉籠りにひそけさよ典獄官舎の朱塗き屋根見ゆ

右の一首、先づ「こんもりと」の形容が月なみでいゝ加減なところで妥協しています。寫生をするならば徹底的に寫生して、もつと適切な言葉を見出すべき

でありませう。たゞしこの歌の場合は「青葉ごもりにひそけさよ」だけで、青葉の繁つてゐる状態が出てゐるのでありますから、第一句の「こんもりと」はむしろ蛇足であります。つぎに第二の難點は「朱塗き」を書いてあかきとよませてありますが、これは少々無理でせう。單に「朱き」でよいではありませんか。なほ、微細なことにわたりますが「青葉」の青と「朱き」の朱と、色彩を二つ出してゐることも、この歌の場合では何か特別な効果をねらつた様子が見えてびつたりしないところがあります。かりに第一句の「こんもりと」を「晝深き」と直して左に書きかへてみませう。

晝深き青葉籠りにひそけさよ典獄官舎の朱き屋根見ゆ

「晝深き」により時間の出たことは、この歌を大分はつきりさせましたが、今度は「晝深き」のきと「朱き」のき、すなはち生硬な「き」音の重複が耳ざはりになつていけません。そこでさらに「朱き屋根」を再考して「屋根朱見ゆ」